

磯 岡 北 遺 跡

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区
土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 17 年 2 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近の台地は、今市扇状地を源とする田川によって低地が刻まれ、南北に広がっています。この低地は小河川によってさらに刻まれ、浸食されなかった部分が微高地となって残っており、ここに大規模な遺跡群が存在しております。それは東谷古墳群をはじめ、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合している地域です。

今回、株式会社仙台銘板の施設建設により影響を受ける埋蔵文化財の取り扱いにつきまして、関係機関との協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方々が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係諸機関、関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 17 年 2 月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤文雄

例 言

- 1 本書は、宇都宮市東谷町（インターパーク59街区5画地）に所在する磯岡北遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は独立行政法人都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う事前調査として実施し、発掘調査から報告書刊行に至るまでの業務を同機構からの委託を受けて、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合が平成16年度に行った。
- 3 本書の編集は勝見一品が担当した。執筆の分担については第3章3に記載した。
- 4 出土遺物の写真撮影は杉原豊氏に依頼して行った。
- 5 発掘調査、資料整理及び報告書作成の過程で各方面から賜った御協力については第3章3に記載した。
- 6 調査に係る諸記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員が保管している。

本文目次

第1章 総説

1 全体的経過	1
(1) 発掘調査前の経過	1
(2) 発掘作業の経過	1
(3) 整理等作業の経過	2
2 調査体制	3

第2章 遺跡

1 遺跡の立地・基本層序	4
(1) 立地	4
(2) 基本層序	4
2 従前の調査	4
3 環境	6
(1) 地理的環境	6
(2) 歴史的環境	6

第3章 調査の方法

1 発掘作業	9
(1) 発掘区の設定	9
(2) 表土の掘削	9
(3) 遺構の発掘	9
(4) 遺構・遺物の表記	10
(5) 測量および遺構の実測	10
(6) 写真撮影	10
2 整理作業	11
(1) 遺物の注記	11
(2) 遺物の接合・復元	11
(3) 遺物の実測	11
(4) 写真の整理	11
3 報告書作成作業	11
(1) 執筆等の分担	11
(2) 図の作成	12

第4章 遺構および遺物

1 概要	13
------------	----

2 竪穴住居	14
(1) 第1号竪穴住居 SI001	14
(2) 第2号竪穴住居 SI002	19
(3) 第3号竪穴住居 SI003	24
(4) 第4号竪穴住居 SI004	27
(5) 第5号竪穴住居 SI005	30
3 掘立柱建物および構列	32
(1) 第1号掘立柱建物 SB001	32
(2) 第1号構列 SA001	32
4 その他の遺構	33
(1) 小穴A群	33
(2) 小穴B群	34
5 古墳	35
(1) 第1号古墳	35
6 その他の遺物	37
(1) 旧石器時代	37
(2) 縄文時代	37
第5章 まとめ	
1 各時代の概要	48
(1) 旧石器時代	48
(2) 縄文時代	48
(3) 古墳時代	48
2 焼失竪穴住居と出土土器の性格	49
(1) 住居の特徴	49
(2) 遺物集中域の様相と背景	50
3 磯岡北古墳群との関係	51
(1) 第1号古墳の位置付け	51
(2) 住居群との関係	51
文献目録	52
挿図作成	53

挿図目次

図

- | | | | |
|----|------------------------|----|------------------------|
| 1 | 発掘区周辺の地形および街路現況 | 15 | 第3号竪穴住居 SI003貼床除去後の実測図 |
| 2 | 周辺の道跡分布図 | 16 | 第3号竪穴住居 SI003遺物実測図 |
| 3 | 座標方眼設定図 | 17 | 第4号竪穴住居 SI004発掘実測図 |
| 4 | 遺構配置図 | 18 | 第4号竪穴住居 SI004貼床除去後の実測図 |
| 5 | 第1号竪穴住居 SI001発掘実測図 | 19 | 第4号竪穴住居 SI004遺物実測図 |
| 6 | 第1号竪穴住居 SI001貼床除去後の実測図 | 20 | 第5号竪穴住居 SI005発掘実測図 |
| 7 | 第1号竪穴住居 SI001遺物実測図(1) | 21 | 第5号竪穴住居 SI005遺物実測図 |
| 8 | 第1号竪穴住居 SI001遺物実測図(2) | 22 | 第1号掘立柱建物 SB001発掘実測図 |
| 9 | 第1号竪穴住居 SI001遺物実測図(3) | 23 | 第1号横列 SA001発掘実測図 |
| 10 | 第2号竪穴住居 SI002発掘実測図 | 24 | 第1号古墳全体実測図 |
| 11 | 第2号竪穴住居 SI002貼床除去後の実測図 | 25 | 第1号古墳主体部実測図 |
| 12 | 第2号竪穴住居 SI002遺物実測図(1) | 26 | 第1号古墳主体部天井石・掘方実測図 |
| 13 | 第2号竪穴住居 SI002遺物実測図(2) | 27 | 第1号古墳遺物実測図 |
| 14 | 第3号竪穴住居 SI003発掘実測図 | 28 | その他の遺物実測図 |

表目次

表

- | | | | |
|---|----------------------|---|----------------------|
| 1 | 遺構別発掘作業工程 | 5 | 第4号竪穴住居 SI004出土遺物観察表 |
| 2 | 第1号竪穴住居 SI001出土遺物観察表 | 6 | 第5号竪穴住居 SI005出土遺物観察表 |
| 3 | 第2号竪穴住居 SI002出土遺物観察表 | 7 | 第1号古墳出土遺物観察表 |
| 4 | 第3号竪穴住居 SI003出土遺物観察表 | 8 | その他の遺物 遺物観察表 |

図版目次

図版

- | | | | |
|---|-----------------------------|----|-----------------------------------|
| 1 | 調査区全景 | 7 | 第1号竪穴住居 SI001(1) |
| 2 | 第1号竪穴住居 SI001 | 8 | 第1号竪穴住居 SI001(2)・第2号竪穴住居 SI002(1) |
| 3 | 第2号竪穴住居 SI002・第3号竪穴住居 SI003 | 9 | 第2号竪穴住居 SI002(2) |
| 4 | 第4号竪穴住居 SI004・第5号竪穴住居 SI005 | 10 | 第2号竪穴住居 SI002(3) |
| 5 | 第1号掘立柱建物 SB001・第1号横列 SA001 | 11 | 第3～5号竪穴住居 SI003～005・第1号古墳 |
| 6 | 第1号古墳 | 12 | その他の遺物 |

第1章 総 説

1 全体の経過

(1) 発掘調査前の経過

今回発掘調査を実施した東谷・中島地区59街区5画地は磯岡北遺跡の範囲内に位置している。発掘調査に至るまでの経過の概略は以下の通りである。

16. 7. 14. (年号の“平成”は省略) 独立行政法人都市再生機構(以下“再生機構”と表記)より宇都宮市教育委員会(以下“市教委”と表記)に対し、当該画地の開発を行うに当たり、埋蔵文化財の取り扱いに関して事前協議の申入れが行われた。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター(以下“センター”と表記)により平成13年度に確認調査が実施されている。その結果、古墳(円墳)1基、竪穴住居6軒の存在が確認されている。その際、円墳1基、竪穴住居1軒については記録保存のための発掘調査が実施されている。

開発計画の内容は、約2,447㎡の予定地に、建物2棟、油水分離槽1基の建設とその他の部分の舗装(舗装厚55cmを予定)とであった。

センターが行った確認調査の結果では、表土層の厚さは30~40cm、確認溝で検出された竪穴住居は5件であった。この結果に基づいて遺跡の取扱いについて協議した結果、次の2案について検討された。

- a 現在の地表に20cm盛土し保護層を設ける。
- b 切土工事とする場合は、市教委が調査主体となり、再生機構が民間調査機関と委託契約を取り交わして発掘調査を実施する。

16. 7. 16. 切土工事を行うb案に決定し、記録保存のための発掘調査を実施する必要があることが確認された。

再生機構から市教委に発掘調査実施に係わる調査仕様書の作成を依頼した。

市教委から栃木県埋蔵文化財発掘調査積算基準に基づく仕様書を再生機構に提示した。

16. 7. 30. 再生機構埼玉地域文化財発掘調査積算基準に基づく仕様書を再生機構に提示した。
16. 8. 3. 埋文協より見積書を提出し、その後、市教委において、市教委、再生機構および埋文協の各担当者が発掘調査の工程について協議を行った。
16. 8. 9. 再生機構から市教委に文化財保護法第57条の2に基づく届出が提出された。
16. 8. 16. 栃木県教育委員会より市教委および再生機構へ取扱い指示が通知された。
16. 8. 31. 市教委と再生機構との間で発掘調査に係わる覚書を締結した。
16. 9. 1. 再生機構埼玉支社と埋蔵文化財発掘調査積算基準との間で業務委託契約を締結し、9. 6. より発掘調査を開始した。

(2) 発掘作業の経過

調査区は東西約75m、南北約54mの範囲で、西側は一段低くなっている幅約15mの平地を挟んで街路に接していた。調査区内の地表はほぼ平坦に均されており、調査範囲を示す杭の打設および草刈りは再生機構に

より既に行われていた。

9月6日から重機による表土の掘削を開始した。排土は土量を計測する必要から方台状に盛ることとし、重機による排土は調査区の東側を、人力によるものは北側を置場とした。

掘削は北西側から東へ向けて進めることとし、0列(40~90)から2列、3列から5列、6列から8列と3段階に分けて進めた。

重機掘削の終了した列から逐次人力で動態による遺構確認面の精査を行い、遺構を抽出した段階で遺構全体配置図を作成して遺構の種類毎に記号・番号を付与し、遺構の性格と調査の難易度により遺構内覆土発掘の工程を検討した。

その結果、竪穴住居を番号順に調査し、続いて掘立柱建物、欄列、古墳と調査を進めることとした。

第1・2号竪穴住居は焼失に伴う焼土中に多量の土器を検出したこと、第1号古墳は主体部が完存していたことにより、実測しながらの発掘となったため、精査には当初に想定した以上の時間を要した。

基準点等測量および遺跡・遺構の実測は埋文協栃木支部(株式会社真和技研・テクノ総合開発株式会社)が担当し、表土掘削と並行して基準点測量と方眼杭打設を行い、個別遺構の実測は発掘作業の進行に合わせて行った。

10.8.に空撮を行った後遺物の取上げ、最終実測を行い、10.14.に発掘作業、撤収作業の全てを完了した。

遺構毎の発掘作業工程の概略は表1の通りである。

表1 遺構別発掘作業工程

項 目	開 始	土層断面 実 測	遺物取上	完 掘	実 測	床面下精 査・実測
第1号竪穴住居S1001	9.20.	10.2.	10.7.	10.12.	10.12.	10.14.
第2号竪穴住居S1002	9.23.	10.2.	10.11.	10.13.	10.13.	10.14.
第3号竪穴住居S1003	9.24.	10.2.	10.11.	10.10.	10.11.	10.11.
第4号竪穴住居S1004	9.27.	10.6.	10.7.	10.12.	10.12.	10.13.
第5号竪穴住居S1005	9.27.	10.6.	10.11.	10.12.	10.12.	--
第1号掘立柱建物SB001	10.4.	--	--	10.5.	10.7.	--
第1号欄列SA001	10.4.	10.6.	--	10.6.	10.7.	--
項 目	開 始	主体部検 出・実測	石棺開蓋 棺内・精査	石棺完掘 ・実測	裏込精査 ・実測	掘方精査 ・実測
第1号古墳	10.1.	10.6.	10.7.	10.10.	10.12.	10.14.

註1 各欄の数字は月日を示す。

2 --欄は該当する作業が行われなかったことを示す。

(3) 整理等作業の経過

整理作業のうち遺跡・遺構の図面については栃木支部(真和技研)で、その他の諸記録および遺物については埋文協三郷事務所で実施した。

出土遺物量は、出土時の破片の状態では整理箱(内寸545×336×150mm)15箱であった。整理作業のうち遺物整理作業の概略工程は以下の通りである。

遺物の移送10.18.	接合・復元10.29.~12.2.	地点別分類10.19.
実測11.16.~1.19.	台帳照合10.18.~10.21.	トレース12.7.~1.31.
水洗10.19.~10.21.	写真撮影1.29.	注記10.21.~10.28.

以上の作業と並行して写真整理、台帳浄書を行い、栃木支部の図面整理作業の完了を承けて12月から報告書編集作業を行い、印刷所に入稿した。

2 調査体制

調査は宇都宮市教育委員会が監理し、埋文協が実施した。発掘作業補助員は遺跡の近隣地域から募集したが、作業に従事した15名のうち発掘作業の経験を有した者は約半数であった。整理作業補助員は三郷市周辺から募集したが経験者を得られず、隣接する千葉県域からの経験者を加えて7名で作業を行った。

以下に調査担当者および関係者名を掲げる。

調査担当者 岩崎祥（調査主任：埋文協調査研究員）、勝見一品（調査員：埋文協調査研究員）

測量担当者 上野高嗣（真和技研）、入江章夫（テクノ総合開発）

補助員 大塚昭男、大塚一寛、小貫宏、木村サソ、小池幸求、小林松男、佐藤英三、首藤よしえ、高橋敏隆、中山真一、新倉千鶴子、南雲実、沼子和子、藤井ツル、柳英一（以上発掘作業）
伊藤幸子、上村康江、木村芳子、小坂木綿子、小松崎幸子、藤川由紀子、松原和子（以上整理作業）

第2章 遺 跡

1 遺跡の立地・基本層序

(1) 立 地

磯岡北遺跡は、田原・願成寺台地（田原面）上に位置している（中村 2004）。この台地は、南流する田川と鬼怒川の開析によって形成され、細長く南北に展開している。本遺跡の遺構確認面の標高は約83.5mであり、東から西へと緩やかに低くなる地形である。

現況地形は、開発による改変を受けており、旧状を把握することはできなかった。しかし、旧地形図と調査区とを重ねることにより、調査地点は西へ舌状に張り出した台地平坦面に位置していたことが明らかとなった。

発掘作業による所見からも、調査区北方において北東から南西へと走る埋没谷が認められ、舌状台地の北限を確認した。埋没谷と台地との比高差は約1.0mを測り、この埋没谷は西方を臨む低地に向けて開けていたと想定される。

今回の調査により検出された遺構は、台地平坦面から斜面地へと変換する台地縁部に展開するものが多く認められた。調査区中央には、センターによる既調査の円墳（磯岡北古墳群、9号墳）が築造されているが（県センター年報 2002）、これは舌状台地の中央部の高所に位置し、西側低地を臨む眺望の良い位置を占地した状況が窺える。従って、既調査の円墳と、今回検出された遺構とは立地、あるいは築造時期に密接な関連があると想定されるが、詳細な検討は本報告の刊行を俟って行いたい。

(2) 基本層序

地表面から遺構確認面にかけての層序は、耕作土および黒褐色土層からなる第Ⅰ層（約40cm）、暗褐色のローム漸移層からなる第Ⅱ層（厚さ約20cm）、明褐色のローム層からなる第Ⅲ層に分層された。また、調査区北西隅の埋没谷の落ち込みでは、第Ⅰ・Ⅱ層が厚く堆積する状況が確認された。

2 従前の調査

磯岡北遺跡の調査区範囲中央約530㎡は、すでにセンターによる発掘調査終了済みの範囲である。遺跡名は東谷・中島地区遺跡群の杉村遺跡17区、調査対象面積2,800㎡と公表されている一部である（県センター年報 2002）。

報文に掲載された写真によると、東西に入る埋没谷を避け、北と南とに調査区を分けて設定しているが、北側調査区は面的な調査を実施しているのに対し、南側に関しては、現況において古墳と判断された地影れに的を絞って調査区を設定していた。そのために、南側の調査区は飛び地になってしまったことで、今回の実施した磯岡北遺跡発掘調査区は、調査済みの周囲を発掘しなければならないという状況が生じるようになった。

杉村遺跡17区からは、縄文時代・古墳時代の遺構、遺物が検出されている。古墳時代の遺構は、円墳7基（1・2・4～6・8・9号墳）、土壇墓2基、竪穴住居1軒を検出しており、これらの古墳群は磯岡北古墳群と呼称されている。円墳の埋葬主体部が明確に残存するものはないが、TK208型式併行期の須恵器、およ

び埴輪が出土していることから、5世紀中葉に形成された古墳群に位置付けられている。

本調査区と重なる南側調査区に位置するのが9号墳で、古墳の南東に土壇墓1基(SZ-21)、北西に竪穴住居(SI-11)が近接している。また、平成7年度の試掘調査では、9号墳の南東において、円筒埴輪を転用した棺が出土している。竪穴住居(SI-11)からは、地床炉らしい痕跡が認められ、土師器甕、埴、埴

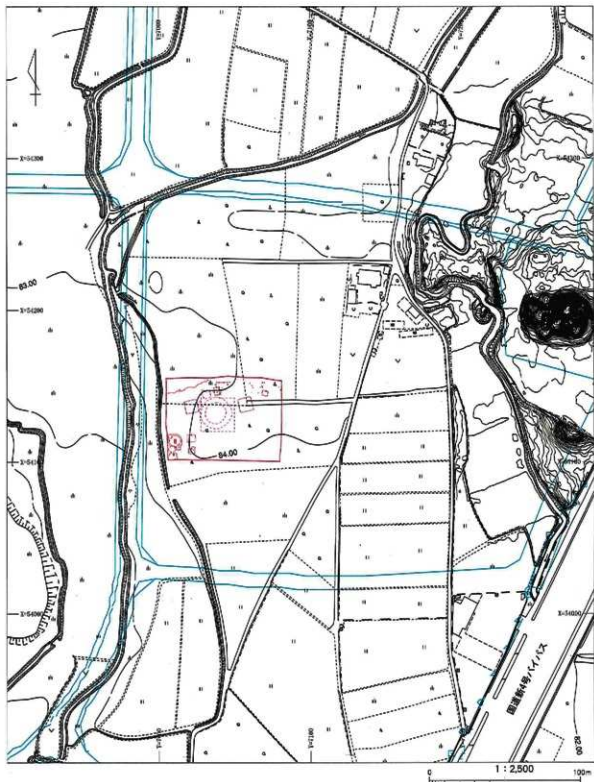


図1 発掘区周辺の地形および街路現況

高坪、剣形石製模造品が出土している。古墳時代中期に位置付けており、土器の形態から古墳群に先行して形成された住居であると判断している。

3 環 境

(1) 地理的環境

磯岡北遺跡は宇都宮市と上三川町の市町境に位置する。宇都宮市街地からは南南東へ約8.4km、上三川町の中心地からは北へ約5.7kmにあり、約1.5km西には田川、約4.5km東には鬼怒川がそれぞれ南流する。

両河川により形成された河岸段丘は、低位である西側を田原・願成寺台地（田原面）、東の高位の台地は岡本・磯岡台地（宝木面）と称され、双方の比高差は約1～2mである。両台地は並列して南北に広がるが、遺跡の位置する両台地の東西幅は、せいぜい3km程度を示しており、極めて細長い台地上に多数の遺跡が展開している。

本遺跡は、田原・願成寺台地の東方の低地へと張り出す西側縁辺部に展開し、田原面から低地へと移る台地の変換点に位置していた。低地との比高差は1～2mで、東方に小河川によって形成された開析低地を臨む。

調査区および周辺の現況は、台地平坦面を利用した土地活用が図られ、主に水田・畑地として豊かな田園地帯が広がる。最近では、東に宇都宮市街地と県南部とを結ぶ主要幹線道路である国道新4号線が南北に縦貫し、南に隣接する上三川町域では、平成12年に北関東自動車道の優先着工区間として都賀町～上三川町区間が開通した。それに伴い、新4号線との合流地点には宇都宮上三川ICが設置され、宇都宮市街地と遠隔地とを中継する交通の要衝となった。さらに、「宇都宮テクノポリス計画」の開発区域として、交通の利便性と結びつけた流通業務施設や先端技術、高度技術産業の研究所・工場などの整備が図られ、遺跡周辺をとりまく環境は着々と変貌しつつある。

(2) 歴史的環境

磯岡北遺跡の位置する田川流域には、南北に展開する地形に沿って数多くの遺跡が存在している。そのなかでも、本遺跡を中心にした宇都宮市南部から上三川町北部にかけては、東谷・中島地区整備事業に伴う大規模な発掘調査が進められ、東谷・中島地区遺跡群として台地に展開する往時の様子が面的に知られることになった。各時代区分でみると、旧石器時代から奈良・平安時代へと間断なく分布しており、本遺跡周辺の地形・風土は居住地として好条件を満たす環境を備えていたといえる。

本遺跡から検出された遺構の主体を成す古墳時代中期は、田川西岸の台地から東岸の田原・願成寺台地（田原面）に集落が形成された時期で、本遺跡の例もその消長の一例を成している。従って、以下では古墳時代中期から後期にかけての状況についてのみ触れることとし、他の時期の詳細については、栃木県埋蔵文化財調査報告書を参照されたい（中村 2004）。

古墳時代中期にみられる古墳の特徴は、前方後円墳への墳丘形態の変化、墳丘規模の大規模化、さらに埴輪の導入が指摘されている。調査区南西約1.5kmに位置する磐塚古墳は、墳長約100mの前方後円墳で、当該期としては県内最大規模である。発掘調査は実施されていないが、採集された円筒・朝顔形埴輪の年代から遅くとも5世紀中葉頃には築造されたとみられ、田川流域を広範に支配していた首長墓と考えられている。

今回検出された第1号古墳は、従前に発掘調査された古墳群との位置関係から、磯岡北古墳群を構成した一つであると考えられる。主体部からの出土遺物は乏しいが、その他の古墳群の築造時期をもとに判断する

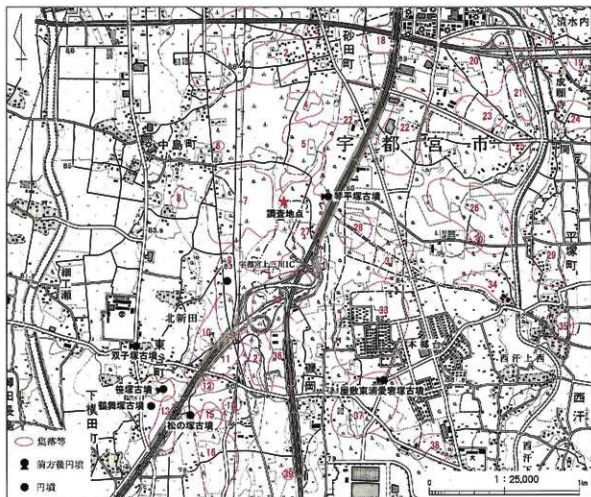


図2 周辺の遺跡分布図

と5世紀中葉に位置付けて大過ないと判断される。墳丘は20m程度の規模に収まることから、笹塚古墳の被葬者よりさらに下層に位置づけられ、遺跡周辺の狭い領域を支配した首長墓と考えられる。

集落遺跡については、古墳と同様の分布傾向を示し、田川東岸のより低位な田原・願成寺台地へと規模の大きな集落が広範囲に展開する。この時期の集落は、杉村遺跡、砂田遺跡、砂田東遺跡、砂田純沼遺跡、立野遺跡、権現山遺跡、原遺跡、磯岡遺跡などで多くの竪穴住居が検出されている。

さらに特殊な遺構として、権現山遺跡では方形構列遺構、居館跡が確認されている。居館跡は、堀と柱穴列によって区画された施設をもち、東辺部での堀の長さは約100m、堀の内側約2mには柱穴列が通っている。区画内には棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡、南東部には2×2間の掘立柱建物跡が確認され、5世紀後葉に比定されている。方形構列遺構は、南北辺の一部が確認され、南北約47mの規模が明らかにされている。

古墳時代後期になると、さらに東方の高所である岡本・磯岡台地（宝木面）へと集落が拡散する傾向が認められる。6世紀代に築造された古墳としては、本調査区東方約200m位置する琴平塚古墳が比定されている。

琴平塚古墳は、新たに岡本・磯岡台地（宝木面）へと進出した古墳である。この時期における古墳の墳長は小規模なもので、当地域において古墳時代中期にみられたような大型前方後円墳は築造されない。

この要因には、大型前方後円墳の築造が当地域からさらに南方の姿川と思川とが合流する栃木市・小山市周辺へと移動したことが背景にあると考えられている。ここでは、6世紀代を通して摩利支天塚古墳（墳長115m）、琵琶塚古墳（墳長123m）、吾妻岩屋古墳（墳長84.7m）へと継続し、県南部における中心地としての規模を示す。

集落遺跡については、古墳の分布と同様に岡本・磯岡台地への遺跡数が増加する。この背景には、古墳被葬者の拡大に伴い、古墳と集落とがより近接して営まれることが要因として考えられている。比較的規模の大きな集落を挙げると、砂田遺跡、立野遺跡、原遺跡、成願寺遺跡、杉村遺跡、西赤堀遺跡、磯岡遺跡、権現山遺跡、百目鬼遺跡などがある。

第3章 調査の方法

1 発掘作業

(1) 発掘区の設定

調査区内には日本測地系第Ⅸ系に基づく座標方眼を設定し位置を表示した。

平成14年4月1日からは改正測量法および同法施行令により世界測地系に移行しているが、これに拠らなかったのは、再生機構により作成された地形図等が日本測地系に基づいており、センターもこれを用いているので表記の整合性を図ったためである。

まず調査区を含む100m単位の大方眼を、 $X = 54100 \sim 54200$ 、 $Y = 7000 \sim 7100$ の範囲に設定し、1Aと表記した。この範囲はセンターが設定した方眼の $X = 66 \sim 70$ 、 $Y = 31 \sim 35$ 区に相当する。

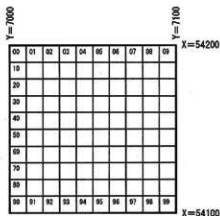


図3 座標方眼設定図

1A方眼内にはさらに10m単位の小方眼に区分し、北西隅を起点として00～99番号を付した(図3)。今回発掘を行った範囲は1A40～48、1A90～98である。

なお、大方眼の番号を今回は便宜的に1Aと付したが、大規模事業地内での調査に際しては全体に亘る大方眼を設定して名称を付与しておくことが必要であることを認識した。

(2) 表土の掘削

表土掘削は重機により行った。埋蔵文化財発掘作業に経験を有する業者の中から有限会社藤枝重機を選定し、機材は掘削に0.7mバックホウ、運土に10tクローラーを使用した。

I層(黒褐色土)の下に続くII層(暗褐色土)が遺構確認面であったことから、掘削はII層上面までとし、調査員立ち会ひの許で指示しながら進めたが、重機運転者の不慎れからII層下部まで掘り下げ過ぎた部分が生じ、発掘作業に熟練した運転者の確保が課題となった。

(3) 遺構の発掘

発掘は竪穴住居、古墳、掘立柱建物・柵列の順に進め、竪穴住居は番号順に発掘を行った。

竪穴住居は全て土層観察畦を十字に設定し、土層断面図を作成後、層位毎に4分割法で発掘を行った。床面まで発掘した段階で遺構の実測を行い、その後床面下の掘方を完掘して最終的な実測図を作成した。

古墳は墳丘を欠失した状態で石棺の蓋石が検出されたので、蓋石の実測後内部の埋土を精査し、その後“キ”字状に土層観察畦を設定し、石棺周りの掘方を発掘した。

周溝は十字の観察畦を設定し、主体部と並行して発掘を行った。この間に作業状況の進行に合わせて実測を行った。

(4) 遺構・遺物の表記

検出した遺構には、遺構を示すSに続けて種別を示す英字記号と検出順の番号を付した。種別を示す記号については独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の表示に従った。

本書で用いた表記は以下の通りである。

SA…構列 SB…掘立柱建物
SI…竪穴住居 SK…土坑

古墳については、当初SMの表記を予定していたが、市教委の指示により“第〇号古墳”の様に表記した。

なお、遺構のうち竪穴住居の番号に関しては、発掘作業の段階では市教委の指示により、既調査の竪穴住居にも002の番号を附していたが、作業終了後遺物の出土が無かったので番号を削除し、以後を繰り上げることとした。遺物注記、図面および遺物台帳は整理作業の段階で訂正したが、写真の写込み画面のみは第2号竪穴住居SI002以降は番号が1番づつ繰り下がってしまう結果となった。

発掘作業時に出土した遺物については、遺構毎に出土順の番号を付した。ただし、覆土中の小破片は各遺構一括として表示し、遺構に伴わない遺物は小方眼で表示した。

(5) 測量および遺構の実測

発掘作業に先立って基準点測量を行い、遺構確認面精査段階で10m方眼に杭を打設した。基準点は再生機構が設置した基準点網の座標測量成果に拠り4級の精度を維持した。

遺構平面図、断面図および遺物出土位置図は電子平板による平板測量で座標上に展開した。成果は測量編集ソフトウェアでDXF形式ファイルに変換して出力した。

測量および遺構実測に使用した器材は以下の通りである。

トータルステーション（2級A）Nikon GF-203、電子平板Nikon NJ-103
測量編集ソフトウェアBLUE TREND Ver.4.20。（福井コンピューター株式会社）

(6) 写真撮影

発掘作業の記録は中判カメラを中心に撮影し、他に35mm判カメラとデジタルカメラを補助的に使用して調査員が撮影した。使用した器材は以下の通りである。

MAMIYA RB-67（使用レンズ：65mm、127mm）、Nikon F80（使用レンズ：24～85mm）
Canon IXY DIGITAL 500

フィルムは、中判、35mm判ともにフジフィルムのNEOPAN 100 ACROS（黒白）、プロビア100F（カラーリバーサル）を使用した。

調査完了時の空中写真は有限会社粟田商事に撮影を依頼した。使用した器材は以下の通りである。

産業用無人ヘリコプター（62cc ガソリンエンジン搭載）
PENTAX 645（使用レンズ：45mm）、CONTAX 167MT（使用レンズ：28mm）

フィルムは、中判はNEOPAN 400 PRESTO（黒白）、35mm判はプロビア400F（カラーリバーサル）を使用した。

2 整理作業

(1) 遺物の注記

遺物の注記は市教委の指示により、市名略号（宇都宮市：UT）、遺跡名略号（磯岡北：IN）、調査次略号（B）、出土遺構番号・位置、遺物番号を記した。その他、出土年月日、出土レベル等は遺物台帳に記載した。遺構外の包含層中出土遺物については小方眼名を記した。

注記の例は以下の様である。

(1号竪穴住居柱穴P5出土)	(1号竪穴住居1号遺物)	(小方眼01出土)
UTIN-B	UTIN-B	UTIN-B
SI001P5	SI001No1	1A01

(2) 遺物の接合・復元

注記・分類の完了した遺物の中で、全体の形状を復元できる資料を中心に作業を行った。接合にはセメダインCを使用した。欠損部の補填には東郷化成株式会社製品のデンカQtex TYPE-B、EVA（エチレン酢酸ビニール）樹脂およびセライト（珪藻土）の混合材に、墨汁と朱墨液で調色した水を加えて使用した。

Qtex、EVA樹脂およびセライトの混合比率は標準仕様に従ったが、調色比率は朱墨液100g、墨汁25gに水を加えて1,000ccとするのを標準としたが、資料の色調に応じて適宜比率を加減した。

なお、欠損部の多い資料については無理な推定復元を行わず、補強をするに止めた。

第1・2号竪穴住居出土資料を中心に接合し得た資料が多かったため、個体別の接合関係を明らかに示すため、遺物台帳とは別途に「磯岡北遺跡資料接合台帳」を作成した。

(3) 遺物の実測

実測は機械実測を行わず全て手測りで行った。実測原因のトレースは製図ペンを用いた手描きとした。コンピュータによるトレース図を作成して比較した結果、調整痕等の細部描写に勝ると判断したためである。

(4) 写真の整理

黑白フィルムは中判・35mm判ともに密着プリントと併せてネガアルバムで保存し、情景毎に説明を付した。カラーリバーサルフィルムは駒仕上げとし、ファイルに納めてスライドボックスに収納した。

3 報告書作成作業

(1) 執筆等の分担

報告書の作成は全て三郷事務所において行い、発掘調査を担当した岩崎祥、勝見一品が従事した。

本文の執筆は以下により分担して行ったが、図、表および図版の作成は勝見一品が担当した。他に、石器・鏃の実測は、渡邊高潔の協力を得た。

第1章 総説	宇都宮市教育委員会、岩崎 祥
第2章 遺跡	勝見一品
第3章 調査の方法	岩崎 祥
第4章 遺構および遺物	勝見一品

報告書全体の編集は勝見一品が行った。

なお、執筆に当っては以下の方々から御教示と協力を戴いた。記して謝意を表したい。

栗田剛久、小林信一、小宮 豪、須藤美智子、立和名明美、西川博孝、水野順敏（五十音順、敬称略）

(2) 図の作成

遺跡測量図、遺構実測図は栃木支部が作成したDXF形式ファイルを、既存の地図類、遺物実測図はスキャナで取込んだEPS形式ファイルをそれぞれコンピューターで編集し原稿とした。

既存の地形図は縮尺1/25,000および1/2,500図を使用した。

各種実測図の縮尺比は2および5の倍数系列とし、以下の通りとした。

遺跡・遺構

遺構配置図…1/500、第1・2号竪穴住居…1/100、第3・4・5号竪穴住居…1/50

第1号掘立柱建物・第1号欄列…1/80、第1号古墳…1/100、第1号古墳主体部…1/40

遺物

土器…1/4、縄文土器片・剥片…1/2、石鏃類・異形石器…1/1

各種実測図では、必要に応じてスクリーントーンを用いた。使用箇所は以下の通りとした。

遺物実測図…土器の赤彩、台石の擦面、礫の敲打痕

遺構実測図…火床部、焼土、炭化材

遺構断面図の土色説明に使用した番号は、自然堆積による覆土をアラビア数字、人為的な埋土を○付き数字として使い分けた。

編集には以下のソフトウェアを使用した。

AUTO CAD LT2000 (AUTODESK)、Photoshop Ver.6.0 (ADOBE)、Illustrator Ver.10.0 (ADOBE)

第4章 遺構および遺物

1 概要

平成13年度にセンターが調査した古墳（円墳）および竪穴住居に関しては、報告書が未刊のためその時期や出土遺物等の詳細は明らかではない。

今回の発掘調査は、すでに調査済の古墳及び竪穴住居跡を除くその周囲約3,800㎡について実施した。調査の結果、新たに古墳1基（円墳）、竪穴住居5軒（古墳時代）、掘立柱建物1棟、欄列1条、土坑1基、小穴等を検出した。

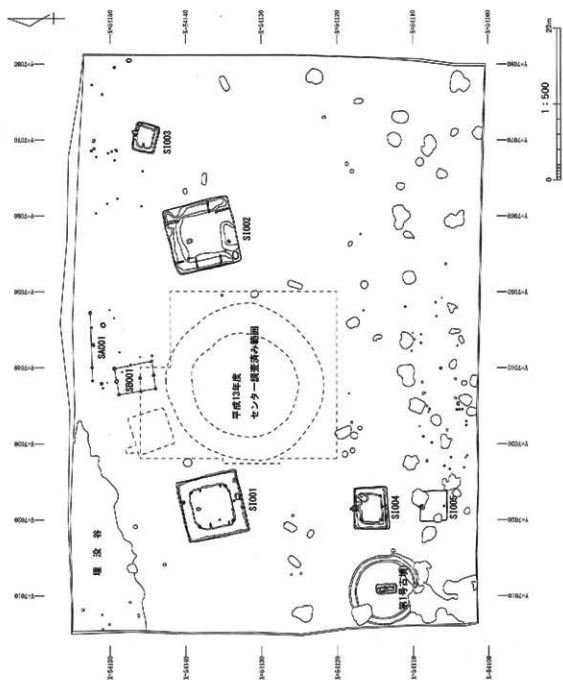


図4 遺構配置図

検出した遺構は、土坑SK001が第4号竪穴住居SI004の貼床下層より検出したことを除いて、すべてが単独で検出され重複は認められなかった。

調査区の現況は平坦に均された草地であったが、南側半分範囲で多数の抜根による擾乱跡を検出し、整然とではないが、その痕跡が東西方向にほぼ並んで検出されたことから、過去において植林等が行われたことが想定された。抜根により擾乱土中に遺物等が混入することがあるため、すべてにおいて掘下げを行ったが、遺物は認められなかった。

2 竪穴住居

(1) 第1号竪穴住居 SI001 (図版2・7・8, 図5～9, 表2)

A 遺構

【位置】1A-51・52・61・62で検出された。東側は平成13年度試掘区に接し、調査区北西部の平坦面に位置していた。

【調査】第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落込みを検出したので、東西・南北方向の試掘溝を設定し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【形状・規模】東西方向9.1m、南北方向8.9mのほぼ正方形を呈する平面形で、床面積は81.0㎡、中軸線(東西方向辺の midpoint で直交する直線)方向はN12°Wであった。

【床・壁】おおむね平坦であったが、住居中央部分では硬質ローム面が露呈しており、多少の凹凸が認められた。一方、周辺の壁に沿って幅約1.3mの範囲は一段低く、深さ15cm前後の掘方を巡らせ、その上をローム塊と暗褐色土を混ぜた土により貼床を構築していた(①・②・③・④層)。確認面からの残存壁高は約45cmで、多少外傾しながら立ち上がる状態であった。

【柱穴】主柱穴4口(P1～4)と入口柱穴(P5)1口を検出した。各主柱穴の径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

P1…径52×32、深さ76、P2…径43×30、深さ80、P3…径35×30、深さ85、P4…径43×30、深さ75。柱間心々寸法は以下の通り(単位はm)。

P1-P2…4.62、P3-P4…4.60、P1-P3…4.50、P2-P4…4.68。

入口柱穴は床面検出時には確認できず、③層を掘方底面まで掘下げた段階で検出した。径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

径30×28、深さ33、床面からの推定深さ40。

【その他の穴】小穴1口(P6)を検出した。西側間仕中央空間の東側開口部のほぼ中央で、主柱穴柱筋(P1-P3)のやや東寄りに位置する。径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

径28×23、深さ17。

【炉】中央部やや北側で検出した。床面を約6cm掘込んでおり、範囲は61×46cmの楕円形であった。遺存状況は不良で、覆土はローム粒に微量の焼土粒と炭化材片を含むのみで、火床部とは判断できない状態であり、遺物も出土しなかった。

【間仕切溝】東、西および南壁に2条ずつ付随する状況で計6条(D1～6)検出された。各壁面に接していたと想定されるが、貼床面から掘削されていたために、床面完掘時には識別できなかった。溝の断面形は「U」字状を呈し、溝の掘込みは浅く貼床の掘方底面までには達していなかった。各間仕切り溝は、主柱穴間の内側に位置しており、掘り込みの先端は主柱穴の柱筋に乗っていた。各々の位置関係

は、D1・3が主柱穴の内側1.2~1.5m、D2・4は0.6~0.7mであることから、東・西壁に付随する間仕切りの配置はほぼ対称をなすと想定される。南壁については、D5が主柱穴から内側約1.5m、D6が0.8mであり、双方のほぼ中央には入口柱穴(P5)が位置していた。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴3口(P7~9)を検出した。いずれも、壁際に構築された貼床面(③・④層)から掘削されていた。P7は長方形を呈し、入口柱穴(P5)の南東に近接する。P8は南壁に接した住居南東隅に位置し、焼失に伴う焼土塊が覆土上層を覆った状態で検出された。P9は床面完掘時に形態を識別することができず、貼床除去後に確認された。断面実測図を作成していないが、発掘時の状況では覆土に焼土の堆積層が認められたために、④層から掘削したと判断される。各貯蔵穴の径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

P7…径92×48、深さ46、P8…径60×56、深さ55、P9…径50×48、深さ53。

〔覆土〕10層に分層した。断面実測図での住居西・北側の覆土の産みは、重機掘削の技量不足によって掘

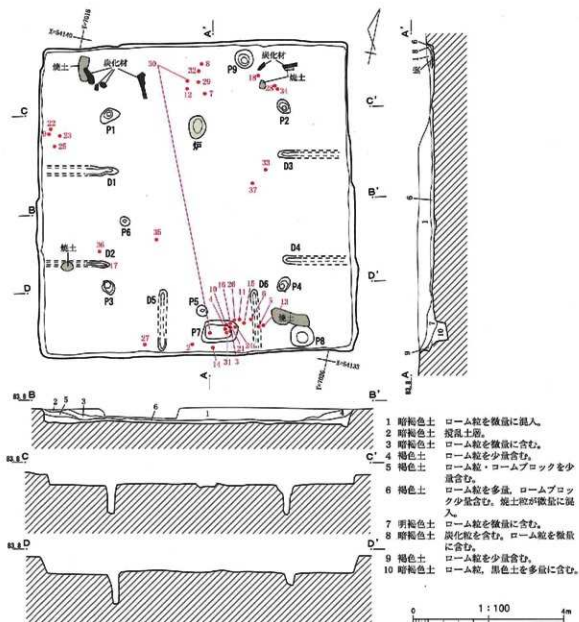


図5 第1号壱穴住居SI001完掘実測図

り過ぎたためである。床面直上の6層中には焼土粒や炭化物が混入していた。部分的に焼土塊も認められたので、焼失住居と判断した。6層は床に接してほぼ水平に堆積していたが、5層以上の部分はレンズ状に堆積していることが認められたので、住居の焼失後は自然堆積により埋没したと判断される。

〔時期〕住居には炉を備え、小型の甕が検出されたこと、さらには土器形態、器種組成から判断すると権現山・百目鬼遺跡Ⅱ期に併行する5世紀中葉に比定される(橋本 2001)。

B 遺物

出土遺物は完形品が多く、良好な状態で検出された。概ね被熱による変色が認められ、焼失による二次焼成を受けたと推察される。掲載出来なかった小破片は、30×25cmの大きさの袋で1袋分検出された。

遺物観察表には接合作業により個体識別が明らかになった土器32点、礫・礫器5点を掲げた。図版および実測図は、遺物観察表の中から全形を把握し得る資料を選別して掲載した。

〔器種組成〕遺物観察表での器種組成は、埴17点(1~17)、手捏ね土器1点(18)、埴1点(19)、高坏6点(20~25)、甕1点(26)、壺1点(27)、甕5点(28~32)であった。

〔分布状況〕土器は、貯蔵穴(P7)周辺、竈の北側の北壁中央、西壁側の3箇所集中していた。なかでも、P7周辺が最大の集中域で、貯蔵穴内に落ち込んでいる個体が多数認められた。器種別での出土傾向に顕著な偏りは見受けられないが、西壁側で高坏3点の集中が見られた。一方、礫・礫器の分布は、住

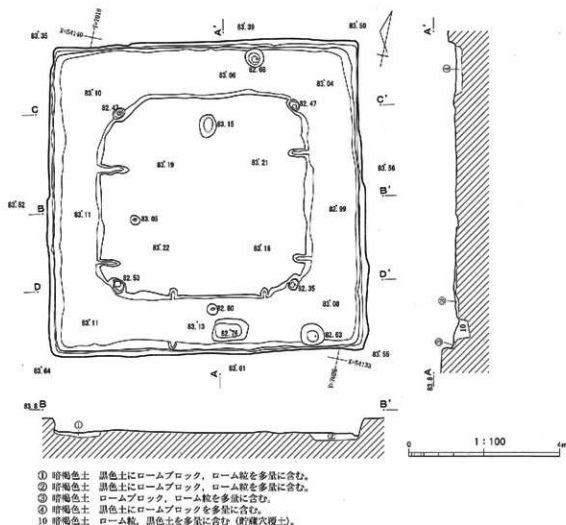


図6 第1号貯穴住居SI001貼床除去後の実測図

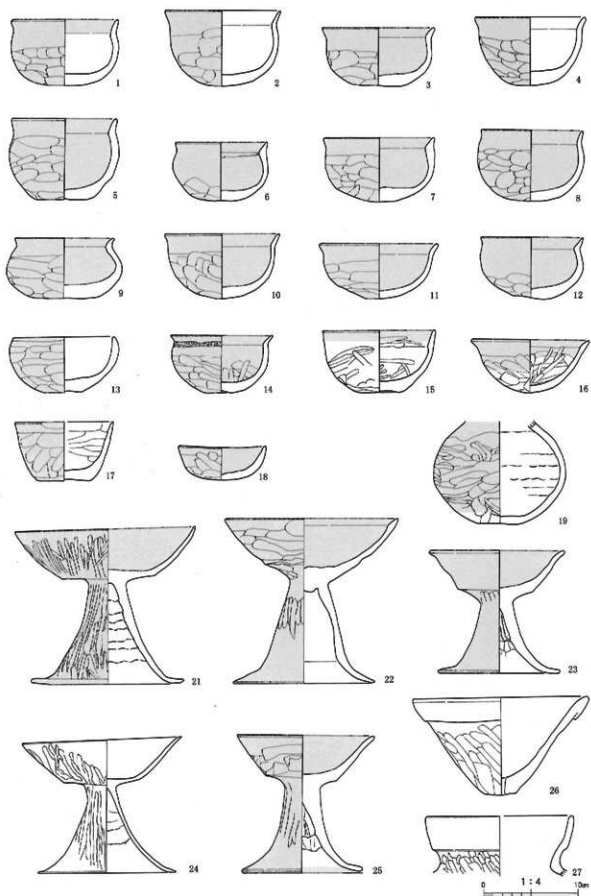


图7 第1号窑穴住居SI001遗物实测图(1)

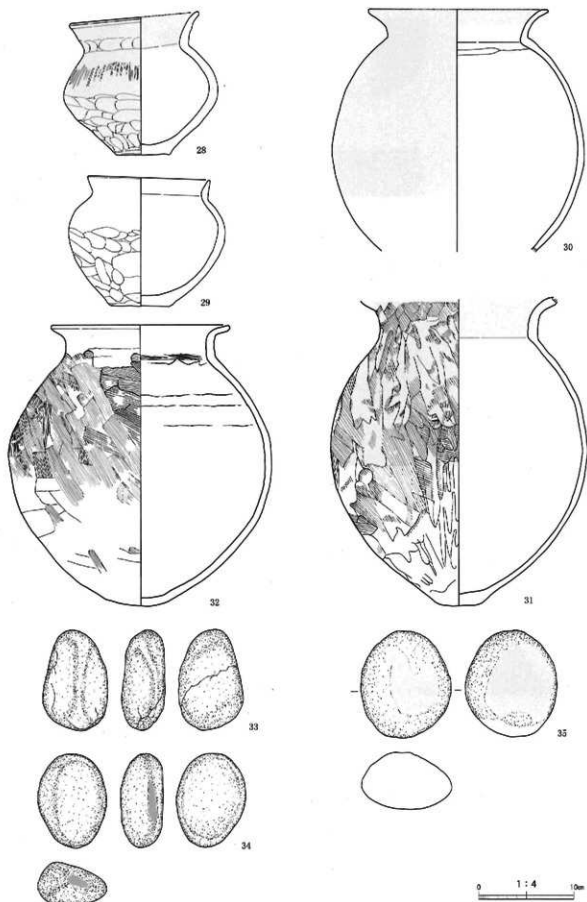


图8 第1号竖穴住居SI001遗物实测图(2)

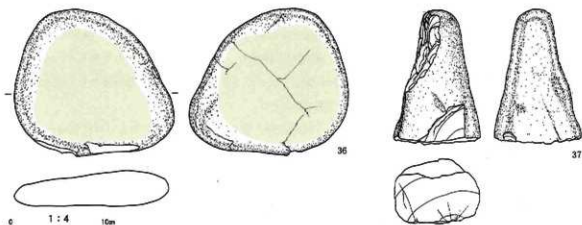


図9 第1号竪穴住居SI001遺物実測図(3)

層中央に偏る傾向が見られ、土器の出土状況とは明らかに異なっていた。

【接合関係】 甕(30)は、南北に離れた地点間の接合関係が認められた。この土器は、被熱の度合の異なる破片が接合するため、住居焼失前にはすでに移動させられていた可能性が高いと判断される。

【出土層位】 床面直上の6層、および貯蔵穴覆土10層から出土するものが大半を占めた。なお、当住居から出土した唯一の埴(19)と甕(27)は、胎土の類似から製作時期の近いものと判断されるが、1層からの出土であるために焼失後に廃棄された可能性も考えられる。

【組合せ】 特徴が把握しやすい埴の分類を行い、他の器種との組合せを検討した。大型甕との組合せは、特徴の共通点を見出せなかった。

埴は雑な作りのA群(1~11・15~17)と、丁寧なB群(12~14)とに分類した。A群はさらに以下のように細分した。

Aa: 外面に多量の煤が付着し淡黄灰色を呈する(1~5)。

Ab: 明褐色を呈する(6~9)。

Ac: 強い被熱で赤色化が認められる(10・11)。

Ad: 砂粒を含む粗い胎土で褐色を呈し外面に黒斑が見られる(15~17)。当群には手捏ね土器(18)も含める。

他の器種との関係は、Aa群の特徴は小型甕(28)と共通し、Ab群は小型甕(29)に類似することから、複数の埴に対して小型甕を含む複数の組合せが想定される。対して、Ad群の特徴は、甕(26)、脚柱部に絞目をもつ高坏(23・25)が共通し、一通りの組合せを構成していたと想定される。また、埴の器形が他とは異質で、多様性に富んでいることから、他群とは異なる様相を示している。

(2) 第2号竪穴住居SI002(図版3・8・9・10, 図10~13, 表3)

A 遺構

【位置】 1A・55・56・65・66で検出された。西に平成13年度に調査された円墳、北東に第3号竪穴住居SI003が接し、調査区北東部の平坦面に位置していた。

【調査】 第II層床下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、東西・南北方向の試掘溝を設定し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【形状・規模】 東西方向9.1m、南北方向9.1mのほぼ正方形を呈する平面形で、床面積は82.8㎡、中軸線方向

はN14°Wであった。

[床・壁] 床はおおむね平坦であったが、住居中央部分では硬質ローム面が露呈しており、多少の凹凸が認められた。一方、壁に沿って幅1.5～2.0mの範囲は一段低く、深さ15cm前後の掘方を巡らせ、その上をローム塊と暗褐色土を混ぜた土による貼床を構築していた(①・②・③層)。確認面からの残存壁高は約35cmで、やや傾しながら立ち上がる状態であった。

[柱 穴] 主柱穴4口(P1～P4)を検出した。各主柱穴の径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

P1…径35×35、深さ39、P2…径37×35、深さ40、P3…径36×34、深さ41、P4…径38×34、深さ34。

柱間心々寸法は以下の通り(単位はm)。

P1-P2…5.15、P3-P4…5.26、P1-P3…4.98、P2-P4…5.25。

[その他の穴] 小穴1口(P5)を検出した。径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

径50×39、深さ38、床面からの推定深さ50。

[炉] 中央部よりやや北西側から検出した。床面を約11cm掘り込んでおり、範囲は82×56cmの楕円形を呈し、覆土はローム粒に極微量の焼土粒を含むのみで、火床部と判断し得ない状態であった。遺物も出土しなかった。

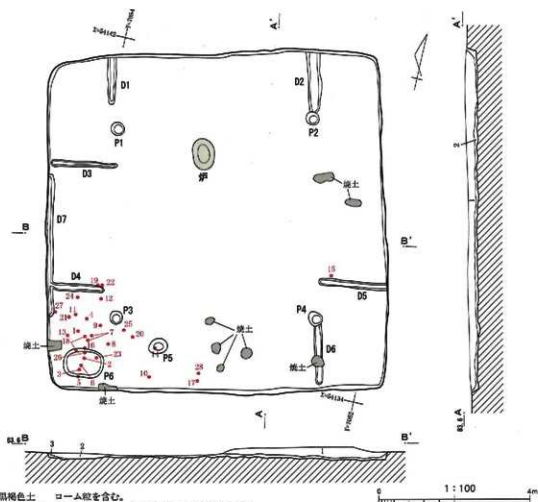


図10 第2号壁穴住居 S1002完掘実測図

[開仕切溝] 北・西壁に各2条、南・東壁に各1条ずつ付随する状況で計6条 (D1~6) 検出された。D4を除く他は、貼床面から掘削されていた。南・北壁側 (D1・2・6) が支柱穴の柱筋と揃っているのに対し、東・西壁 (D3・4・5) は支柱穴から70~90cm内側に位置していることから、東西・南北が対をなす配置をとっていた可能性が高い。

[周溝] 西壁に沿って1条 (D7) 検出された。

[貯蔵穴] 隅丸方形の1口 (P6) を検出した。貼床されない住居南西隅に位置し、ローム床面から掘削されていた。貯蔵穴には北・東周縁に沿って、西・南壁に取付く提状の高まりが伴っていた。ローム塊を主体として構築されていたが、調査員の認識不足により記録せずに掘削してしまった。貯蔵穴の径と深さは以下の通りである (単位はcm)。

P6…径106×74、深さ24。

[覆土] 3層に分層された。断面図西側の覆土の厚さは、重機掘削の技量不足によって掘り過ぎてしまった結果である。床面直上の2層は、焼土粒と炭化材を含んでいた。また、部分的に焼土塊が見受られたため、第1号竪穴住居S1001と同様に焼失住居と想定される。堆積状況から、焼失後は自然堆積により埋没したと推測される。

[時期] 土器形態、器種組成から判断すると権現山・百目鬼遺跡Ⅱ期に併行する5世紀中葉に比定される

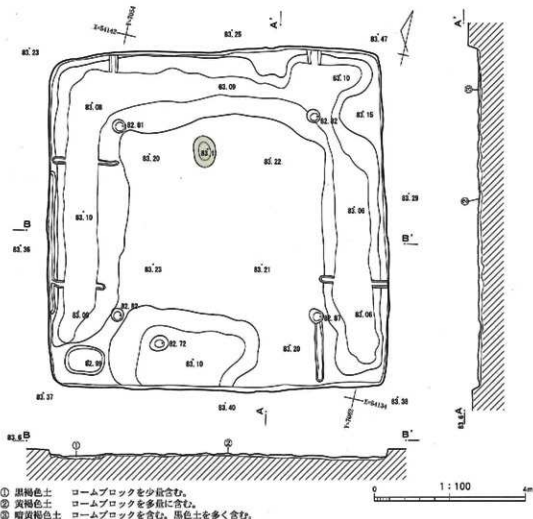


図11 第2号竪穴住居S1002貼床除去後の実測図

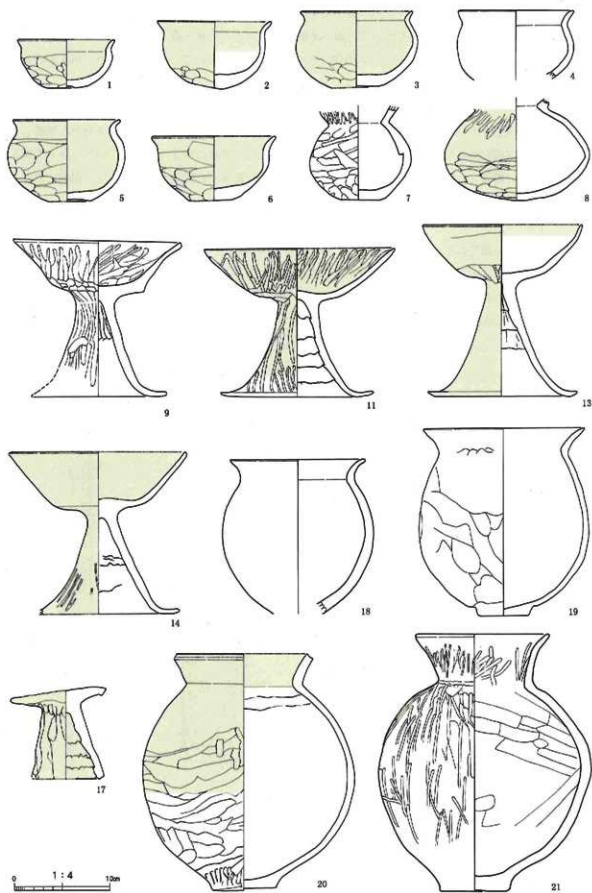


图12 第2号竖穴住居SI002遺物実測圖(1)

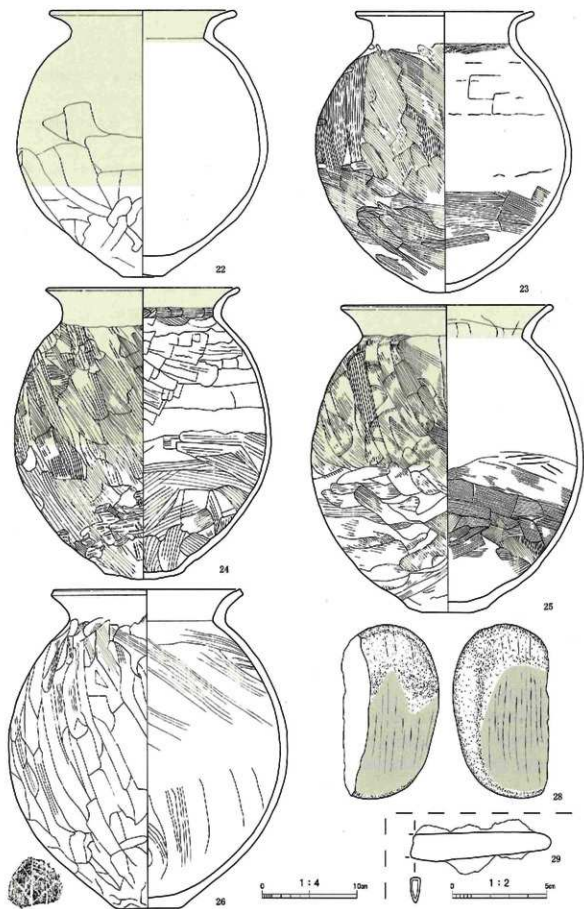


图13 第2号竖穴住居SI002遗物实测图(2)

(橋本 2001)。

B 遺物

完形品が多く、良好な状態で検出された。概ね被熱による変色が認められ、焼失による二次焼成を受けたと推察される。掲載出来なかった小破片は、30×25cmの大きさの袋で1/2袋分検出された。

遺物観察表には、接合作業により個体識別が明らかになった土器27点、台石1点、刀子1点を掲げた。図版および実測図は、遺物観察表の中から全形を把握し得る資料を選別して掲載した。

【器種組成】遺物観察表での器種組成は、埴6点(1～6)、埴2点(7・8)、高坏8点(9～16)、器台1点(17)、壺2点(20・21)、甕8点(18・19・22～27)であった。

【分布状況】貯蔵穴(P6)周辺にはほぼ限定され、貯蔵穴内に落ち込んでいる個体も多数認められた。

【接合関係】狭い範囲に分布した破片が接合しているほか、被熱の度合の異なる破片が接合する例が確認された。埴(3)は、使用に伴う多量の煤が付着した破片と、被熱で赤色化して煤が飛んでしまった破片とが接合した。甕(25)は、被熱により器形が大きく歪み、色調が明らかに異なる破片が接合した。これらの土器は、住居焼失時にはすでに破損していた可能性が高いと判断される。

【出土層位】床面直上および貯蔵穴覆土2層からの出土が大半を占めた。

【組合せ】特徴がみられる埴の分類を行い、他の器種との組合せを検討した。大型甕との組合せは、特徴の共通点を見出し得なかった。

埴は丁寧な作りのA群(1～5)と、粗雑な作りのB群(6)とに分類した。A群はさらに、以下のように細分した。

Aa：口辺部が直線的に外反し、焼成は堅緻で色調は暗褐色を呈する(1・2)。

Ab：胴部中位の張りが強く、くびれが強い頸部に外反する短い口縁が付く。外面には多量の煤が付着する(3～5)。

他の器種との関係は、Aa群の特徴は甕(19・22)と共通し、Ab群は小型甕(18)に類似することから、複数の埴に対して甕を含む複数の組合せが想定される。

その他に、焼成・色調・整形技法の特徴から、埴(7)と壺(20)の組合せが想定される。

(3) 第3号竪穴住居 SI003 (図版3・11, 図14～16, 表4)

A 遺構

【位置】1A-56・57で検出された。南西約15mには第2号竪穴住居SI002が所在し、調査区北東の台地平坦面に位置していた。

【調査】第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、東西・南北方向の試掘溝を設定し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【形状・規模】東西方向3.8m、南北方向3.1mの東西方向に長い方形で、床面積は11.8㎡、中軸線方向はN15°Eであった。

【床・壁】おおむね平坦であったが、ローム面を床面とする中央部が窪み、壁際の貼床面が僅かに高かった。北壁に設置されたカマドの前面を除いた壁際を溝状に掘込み、ローム塊を多量に含む暗褐色土で貼床していた(①・②・③層)。

掘方の規模は、壁際からの幅約0.5m、掘り込みが明瞭な南壁側での最大深度は約8cmであった。確認面からの残存壁高は約10cmで、床面から外傾して直線的に立ち上がっていた。

【柱穴】検出されなかった。

〔間仕切溝〕西壁中央付近に1ヶ所検出された。西壁に接していたと想定されるが、壁際に廻る貼床面から掘り込まれていたために識別できなかった。断面形はU字状で、幅25cm、西壁からの推定全長は約1.1mであった。溝の掘り込みは浅く、貼床掘方底面までは達していなかった。

〔竈〕北壁中央やや東側に位置し、規模は66×75cmであった。残存状況は悪く、構築粘土はほとんど用いられていなかった。床面を掘り窪めた痕跡は確認されず、床面と同一の高さで火床部が検出された。煙道部は北壁を約40cm掘込んでいた。

〔覆土〕2層に分層された。堆積状況から、自然堆積と判断される。

〔時期〕竈が付設され、柱穴が伴わない住居形態で、長胴甕、口辺が内湾する鉢が検出されたことから判断すると、砂田遺跡1区SI-18住居に併行する7世紀中葉に比定される(藤田 2002)。

B 遺物

遺物観察表には、接合作業により個体識別が明らかになった土器4点、礫3点を掲げた。図版および実測図は、遺物観察表の中から全形を把握し得る資料を選別して掲載した。掲載出来なかった小破片は、30×25cmの大きさの袋で1/5袋検出された。

〔器種組成〕遺物観察表での器種組成は、坏1点(1)、鉢1点(2)、甕2点(3・4)であった。

〔分布状況〕土器は竈の周辺から住居北東隅にかけて出土した。一方、礫は竈から外れた位置から出土し、土師器と礫とは異なる分布が確認された。

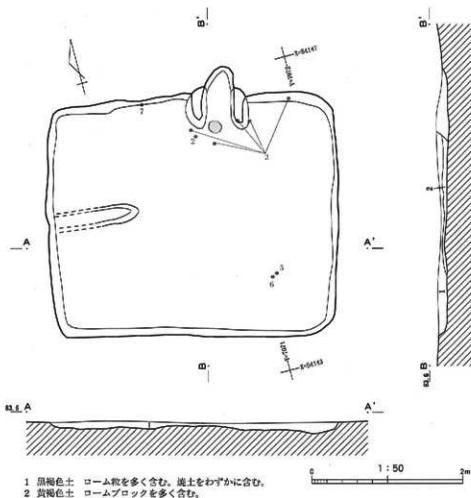


図14 第3号竈穴住居SI003完掘実測図

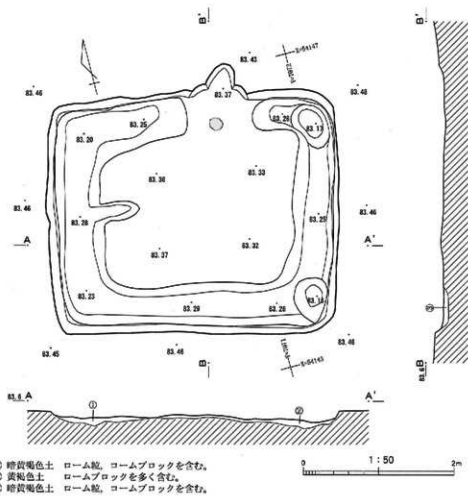


図15 第3号竪穴住居SI003貼床除去後の実測図

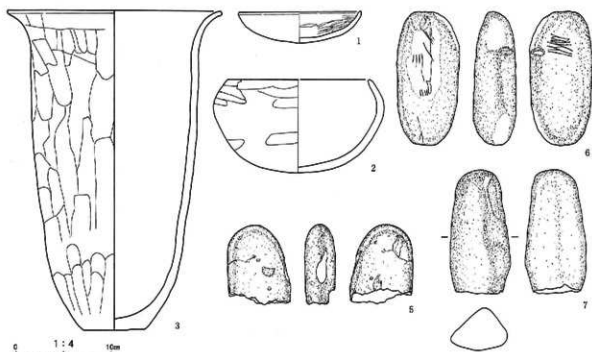


図16 第3号竪穴住居SI003遺物実測図

【接合関係】 窠(3)の破片が窠周辺で検出された。

【出土層位】 床面直上の1層中から出土するものが大半を占めた。

(4) 第4号竪穴住居 SI004 (図版4・11, 図17~19, 表5)

A 遺構

【位置】 1A-81・82で検出された。南方約8mには第5号竪穴住居 SI005, 西方約11mには第1号古墳主体部が所在し, 調査区南西の台地平坦面に位置していた。

【調査】 第II層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので, 東西・南北方向の試掘溝を設定し, 覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【重複】 土坑 SK001と重複関係にある。土坑 SK001は, 北東-南西に長軸を持つ約1.4×0.9mの隅丸方形で, 第4号竪穴住居 SI004床面からの深さは約42cmであった。竪穴住居の掘方が, 土坑 SK001を切って貼床を構築している状況が確認されたため, 土坑 SK001が SI004に先行すると判断された。

【形状・規模】 平面形は, 東西約5.5m, 南北約4.5mのやや東西に長い長方形で, 床面積は24.8㎡, 中軸線はN0°であった。

【床・壁】 床面はおおむね平坦であるが, ローム面を床面とする床面中央の高さに対し, 壁際に巡る貼床面がわずかに窪んでいた。貼床面は壁際の四周を溝状に掘り込み, ローム塊を多量に含む暗褐色土で構築していた(①・②・③層)。貼床掘方の断面形は, おおむね逆台形状を呈していたが, 部分的に階段状に掘込まれていた。掘方の規模は, 壁際からの幅約1.0m, 深さ約15cmであった。ただし, 窠の前面(南側)に限っては, 掘方の幅が約70cmと狭く, ロームの床面が北へと張り出す状況が確認された。残存壁高は10~20cmで, 床面から僅かに傾斜して立ち上がっていた。

【柱穴】 主柱穴4口(P1~4)と入口柱穴(P5)1口を検出した。各主柱穴の径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

P1…径25×35, 深さ42, P2…径35×40, 深さ47, P3…径25×25, 深さ48, P4…径28×25, 深さ46。柱間心々寸法は以下の通り(単位はm)。

P1-P2…3.12, P3-P4…3.15, P1-P3…2.55, P2-P4…2.52。

各主柱穴はローム床面の四隅に位置していた。柱穴の埋土は, 土層断面実測図を記録していないために図面を掲載していないが, 現場においておおよそ上・下層に分層される状況が認められた。下層は貼床構築と併行して付き回めた①・②・③層の埋土, 上層はロームブロックを主体とした柱を固定するための埋土であった。

入口柱穴は, 主柱穴P3-P4間の中央やや南側に寄っている。床面の確認時には柱穴の存在を識別できず, 貼床除去後に検出された。柱穴底面は, 貼床掘方の底面をさらに掘抜いた状態を示しており, 貼床面から掘削されたと想定される。径と深さは以下の通りである(単位はcm)。

径22×20, 床面からの推定深さ34。

【竪】 北壁中央に位置し, 良好な状態で検出された。規模は90×100cm。袖部は白色粘土を用いて構築し, 住居貼床面上に付設されていた。火床面は, 貼床面を掘削し, 再度, 床面の高さまで埋め戻して構築していた(③層)。その際の, 掘方の深さは床面から約25cmで, 貼床構築時の掘方底面よりもさらに深く掘削していた。火床部は床面の高さで検出され, 赤く焼けていた。燃焼部は, 白色粘土を多量に含む天井部の崩落土が堆積していた。煙道部は, 北壁を約50cm掘込んでおり, 側面には袖部から続く白色粘土が貼り付けられていた。

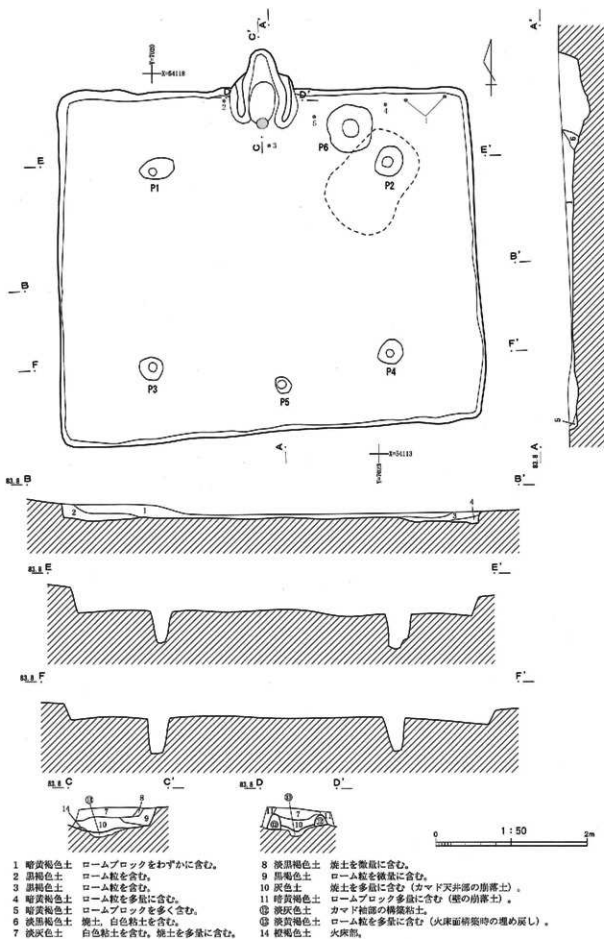


図17 第4号竪穴住居S1004完掘実測図

【貯蔵穴】貯蔵穴1口（P6）を検出した。竈の東側に位置し、北側は北壁に近接していた。平面形は不整形で、規模は60×62cm。床面からの深さ約30cm。貼床面から掘削されており、底面は貼床掘方の底面をさらに深く掘り込んでいた。

【覆土】6層に分層した。地積状況から、自然地積と判断される。

【時期】器種組成および、内面の磨き調整の省略と小型化が進んだ坯（1）をもとに判断すると、砂田遺跡1区SI-20住居に併行する7世紀前葉に比定される（藤田 2002）。

B 遺物

遺物観察表には、接合作業により固体識別が明らかになった土器3点、礫2点を掲げた。図版および実測図は、遺物観察表の中から全形を把握し得る資料を選別して掲載した。掲載出来なかった小破片は、30×25cmの大きさの袋で1/5袋分検出された。

【器種組成】遺物観察表での器種組成は、坯1点（1）、甕2点（2・3）であった。

【分布状況】竈が付設された北壁側に集中していた。器種別では、甕が竈の周辺、坯は壁柱住居北東隅から

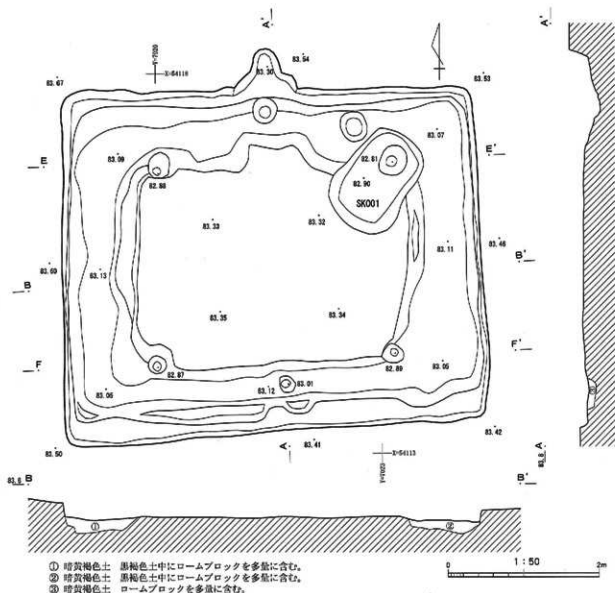


図18 第4号竈穴住居SI004貼床除去後の実測図

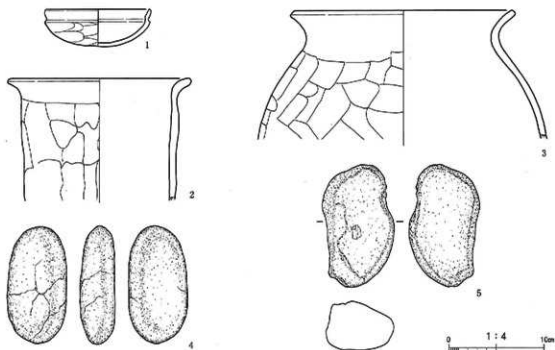


図19 第4号壜穴住居SI004遺物実測図

出土した。

[出土層位] 床面直上の1層からの出土が大半を占めた。

(5) 第5号壜穴住居SI005 (図版4・11, 図20・21, 表6)

A 遺構

[位置] 1A-91・92で検出された。北方約8mには第4号壜穴住居SI004, 北西約13mには第1号古墳主体部が所在し, 調査区南西の台地平坦面に位置していた。

[調査] 第II層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので, 東西・南北方向の試掘溝を設定し, 覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

[重複] 風倒木により, 北東隅と南西隅付近に攪乱を受けていた。北東隅の攪乱は北壁に付設された甕を破壊していた。

[形状・規模] 東西方向4.1m, 南北方向3.6mのやや東西に長い方形を呈する平面形で, 床面積は14.8㎡, 中軸線方向はN0°であった。

[床・壁] ローム面を床面としており, 貼床は検出されなかった。床面はおおむね平坦であった。残存壁高は約20cmで, 床面から外傾して直線的に立ち上がっていた。

[柱穴] 検出されなかった。

[入口柱穴] 住居北壁際の中央から1口(P1)を検出した。各数値は以下の通り(単位はcm)。

径24×25, 床面からの深さ19である。

[甕] 北壁中央に位置し, 北東隅の攪乱によって破壊されていた。火床部・燃焼部は完全に破壊されていたが, 火床面を作る際の掘方が検出された。径は53×43cmの不整形円形で, 床面からの深さは約19cmであった。煙道部は北壁を約40cm掘り込んでいた。

[覆土] 12層に分層された。堆積状況から, 自然堆積と判断される。

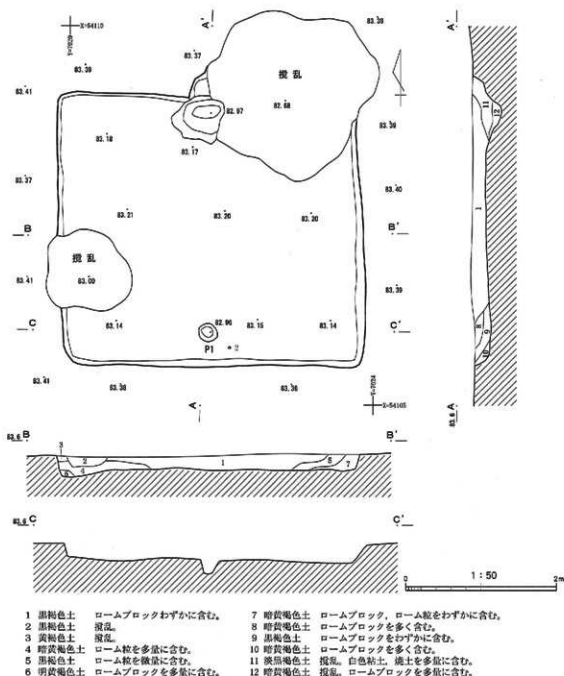


図20 第5号竪穴住居 SI005完掘実測図



図21 第5号竪穴住居 SI005遺物実測図

[時期] かえりを有する須恵器坏蓋の年代から、7世紀後葉に比定される。

B 遺物

接合作業により個体識別が明らかになった土器2点を造物観察表、図版および実測図に掲載した。掲載出

来なかった小破片は、30×25cmの大きさの袋で1/3袋分検出された。

【器種組成】須恵器坏蓋1点（1）、坏1点（2）であった。

【分布状況】住居に伴って出土した遺物は坏（2）のみで南壁中央から出土した。須恵器坏蓋（1）は、北東隅の掘乱坑から検出されたが、他の遺構と重複がないことから当住居に伴うと判断した。

【接合関係】甕（3）の破片は竈周辺に散乱していた状況であった。

【出土層位】床面直上からの出土が大半を占めた。

3 掘立柱建物および柵列

(1) 第1号掘立柱建物 SB001（図版5、図22）

【位置】1A-53・54で検出された。調査区北側中央部から西に向かう谷の緩斜面で南東から北西へと地形が低くなる部分に位置し、北方約5mには第1号柵列SA001が存在する。

【調査】第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、柱の配列を検討したうえで発掘を実施した。発掘の手順としては、隅柱穴は棟柱筋と妻柱筋の直交点の対角部2箇所を扇形に、その他の柱穴は外側を半裁し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【形状・規模】桁行2間、梁行2間の柵柱建物である。東西方向3.6m、南北方向4.9mの南北棟建物で、床面積は17.6㎡、中軸線方向はN9°Wであった。

【柱穴】柱穴8口（P1～8）を検出した。各柱穴の径と深さは以下の通りである（単位はcm）。

P1…径36×32、深さ13、P2…径53×41、深さ19、P3…径48×43、深さ21、P4…径30×28、深さ35、P5…径35×33、深さ19、P6…径30×30、深さ26、P7…径38×33、深さ30、P8…径31×29、深さ18。

柱間心々寸法は以下の通り（単位はm）。

P1-P2…1.78、P2-P3…1.70、P3-P4…2.20、P4-P5…2.85、P5-P6…1.88、P6-P7…1.78、P7-P8…1.96、P8-P1…2.94。

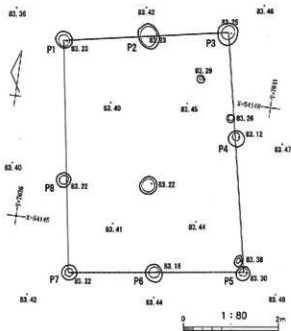


図22 第1号掘立柱建物SB001発掘実測図

【時期】中軸線の傾きが、第1号竪穴住居S1001、第2号竪穴住居S1002と近似していることから判断すると、5世紀中葉に比定される。

【遺物】柱穴埋土からの遺物出土は認められなかった。

(2) 第1号柵列 SA001（図版5、図23）

【位置】1A-43・44で検出された。調査区北隅を東西に走る谷の緩斜面に位置し、地形は南東から北西にかけて徐々に低くなる。南方約5mにはSB001が存在する。

【調査】第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、柱の配列を検討したうえで掘削を実施した。掘削の手順として、柱穴

の南側を半載し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

〔形状・規模〕 不規則な柱間をとる欄列と推定される。全長約9.05m。柱筋方向はN2°Wであった。

〔柱 穴〕 柱穴5口 (P1～5) を検出した。各柱穴の径と深さは以下の通りである (単位はcm)。

P1 … 径25×35, 深さ12, P2 … 径35×40, 深さ12, P3 … 径25×25, 深さ30, P4 … 径28×25, 深さ27, P5 … 径36×48, 深さ32。

柱間心々寸法は以下の通り (単位はm)。

P1-P2 … 1.75, P2-P3 … 3.0, P3-P4 … 2.35, P4-P5 … 1.95。

掘方の径は不揃いであったが、掘方底面は標高83.1m程度で水平に保たれており、斜面地を考慮して掘込んだものと推察される。

〔覆 土〕 各柱穴には、黒褐色土の柱痕が確認された。

〔時 期〕 柱筋の振れが第4号竪穴住居S1004, 第5号竪穴住居S1005の軸線に近いことから判断すると、7世紀代の範疇に位置付けられる。

〔遺 物〕 柱穴埋土から遺物は出土しなかった。

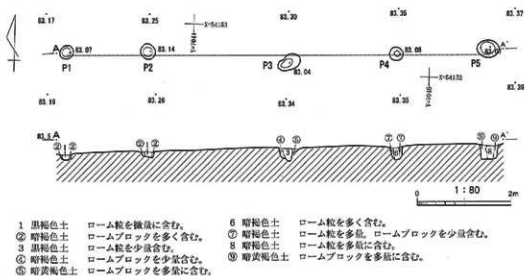


図23 第1号欄列SA001完掘実測図

4 その他の遺構

(1) 小穴A群

〔位置〕 1A-46～48・56～58にまたがって検出された。調査区北東隅の台地平坦面に位置し、調査区では最も高所に展開している。周辺には第2号竪穴住居S1002, 第3号竪穴住居S1003が所在する。

〔調査〕 第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、小穴の長軸方向を半載し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

〔形状・規模〕 掘方の径22～74cmであった。

〔時期〕 不明。

〔遺物〕 小穴埋土から遺物は出土しなかった。

(2) 小穴B群

〔位置〕 1A-43・44・53・54にまたがって検出された。調査区北側の第1号横列SA001と第1号掘立柱建物SB001に近接して展開していた。

〔調査〕 第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落ち込みを検出したので、小穴の長軸方向を半裁し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

〔形状・規模〕 掘方の径14～69cmであった。

〔時期〕 不明。

〔遺物〕 小穴埋土からの遺物出土は認められなかった。

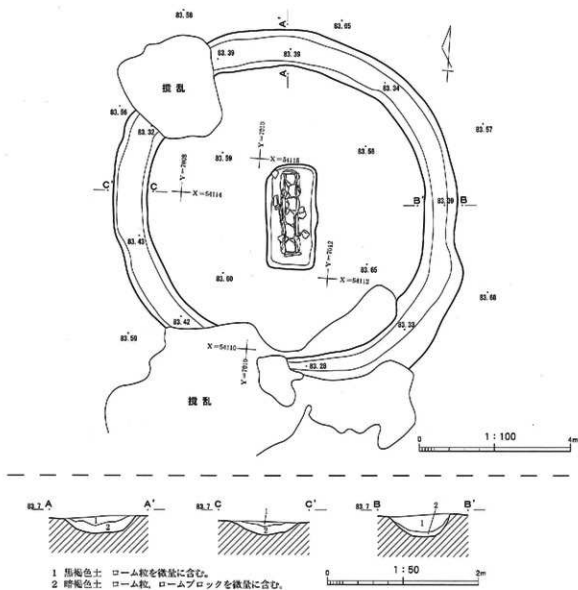
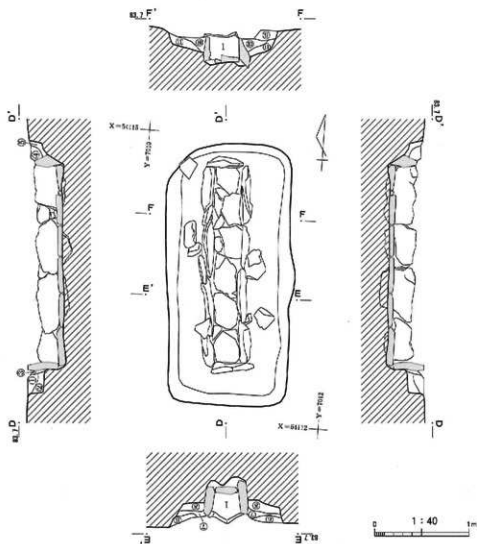


図24 第1号古墳全体実測図



- | | | | |
|---------|-----------------|---------|-------------------|
| ① 黒黒褐色土 | ローム粒を微量に含む。 | ⑦ 淡灰色土 | 粘土層、ロームブロック含む。 |
| ② 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | ⑧ 暗黄褐色土 | ロームブロック多量、粘土粒を含む。 |
| ③ 灰色土 | 粘土層。 | ⑨ 黒褐色土 | ローム粒を微量に含む。 |
| ④ 淡灰色土 | 粘土層、ロームブロックを含む。 | ⑩ 淡灰色土 | 粘土層、ロームブロックを含む。 |
| ⑤ 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | ⑪ 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| ⑥ 黒褐色土 | ローム粒を微量に含む。 | 1 黒褐色土 | 石棺内覆土。 |

図25 第1号古墳主体部実測図

5 古墳

(1) 第1号古墳 (図版6・11, 図24~27, 表7)

A 遺構

【位置】調査区の南西端で検出された円墳で、1A・80・81・91に位置する。旧地形図によると調査区の西側は低地帯が広がり、その低地を隔む台地の縁辺部に相当する。

【調査】第Ⅱ層最下面で黒褐色層の落込みを検出したので、東西・南北方向の試掘溝を設定し、覆土の層序を確認しながら層毎に発掘した。

【規模】墳丘部分は東西径約7.4m、南北径約7.6mで、周溝部分は抜根の擾乱により遺存状況は良くないが、本来は全周していたと推測され、周溝を含めると東西径約9.2m、南北径9.4mの規模であったと推

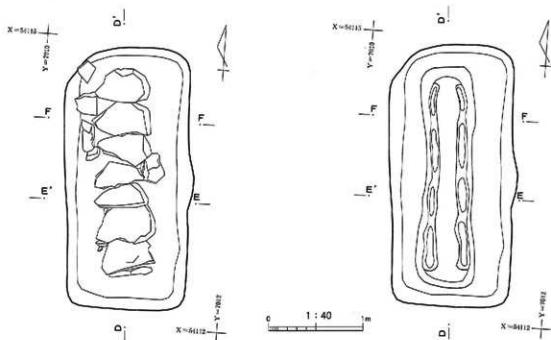


図26 第1号古墳主体部天井石・掘方実測図

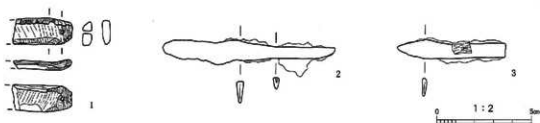


図27 第1号古墳遺物実測図

定される。

〔墳丘・周溝〕調査前の現状では、墳丘部はすでに削平されて存在を認識することはできず、表土除去の際に周溝部分の落ち込みを確認した。従って、墳丘構築時における工法や工程については明らかにし得なかった。

周溝は、北西部分の一部は抜根による攪乱のため遺存していない、また、南側部分についても、広範囲にわたって天地返しを受けており、残存状況は良好ではない。

遺構検出面において、周溝幅は約0.8mから1.4m、深さは約20～30cmを測り、断面形はU字を呈していた。覆土は2層に分層され、下層はローム粒を多く含んでいた。

〔埋葬施設〕主体部は墳丘部分のほぼ中央に検出され、段を有する長方形の掘方内に箱式石棺が構築されていた。掘方の平面形態は中央部分がややくびれる長方形で、規模は、全長2.75m、全幅1.3～1.4m、検出面から掘方中央部底面までの深さは約35cmであった。石棺側壁が埋設されていた部分は中央部よりもさらに5cmから10cmほど低かった。中軸線はN4°Wであった。

石棺は表土除去の際に蓋石の一部を欠損したが、ほぼ完全な形で検出した。石棺の中軸線はN4°Wで、内法寸法は、主軸長2.05m、北辺幅0.28m、中央幅0.24m、南辺幅0.26m、深さ0.24mの長方形であった。

棺材には、すべて流紋岩の板石が用いられ、蓋石7枚、東側壁5枚（主要材4枚）、西側壁6枚（主要材4枚）、南北両側壁各1枚、床石11枚（主要材6枚）で構成されていた。

石棺内面には赤色顔料が塗布されていた。掘方内の側壁板石は埋められた部分には顔料が塗布されていないことから、石棺を構築した後に塗布されたと判断された。赤色顔料は蓋石内面にまで塗布されていた。

また、主体部検出時に裏込め上面で掘方範囲内から7枚の板石を検出した。側壁は小割石を楔状に差し込んだり、側石同士が部分的に重複する様に組み合わせて密閉性を高めているのに対し、蓋石は、板石同士の隙間に白色粘土を充填する程度で側石に比べ密閉性に欠け、そのため、石棺内には暗褐色土が充填していた。石棺内覆土は締まりが無く、蓋石の隙間から流れ込んだと推定された。

側壁裏込めは、下層部分をローム、上層の蓋石付近に白色粘土を主体とした土で突き固められていた。

[時期] 出土した石製模造品（鎌形）には、柄の装着部に折り返しが表現されていること、さらには第1号古墳が磯岡北古墳群に含まれる可能性があることから、5世紀中葉に比定される（センター年報2002）。

B 遺物

石棺内覆土より石製模造品（鎌形）1点、刀子2点が出土した。周溝内からの出土遺物は認められなかったが、側壁の裏込め最上面、旧墳丘最下層から石鏃が1点出土した。

6 その他の遺物

(1) 旧石器時代（図版12、図28、表8）

剥片（11～15）が検出された。礫表面を打面とし、縦長の剥片を取ろうとしているために、旧石器時代に位置付けた。いずれも、壱穴住居覆土からの出土であり、構築時の掘り込みの際に浮上したと考えられる。第5号壱穴住居SI005からは接合する剥片（13・14）が検出されており、調査区西側の台地縁辺部に集中する傾向が認められた。

(2) 縄文時代（図版12、図28、表8）

石鏃（9）、異形石器（10）、および早期の燃糸文系（1～7）、後期の堀之内I式（8）の土器片が検出された。遺物は調査区南西側に集中しており、旧石器時代の遺物分布域とおおむね重なる状況が認められた。第4号壱穴住居SI004では、貼床構築土中に燃糸文系の土器が混入していた。住居に先行する遺構には土坑SK001が存在し、遺物は伴っていないが、土器の出土状況と関連付けると、縄文時代早期に位置付けられる遺構の可能性も考えられる。

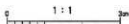
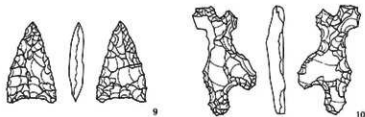
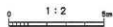
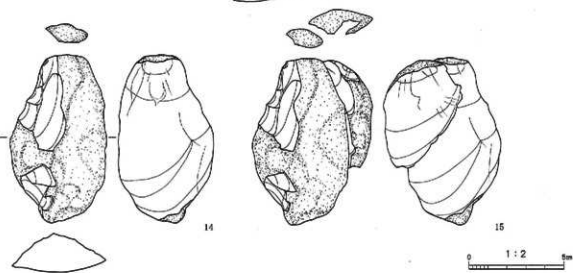
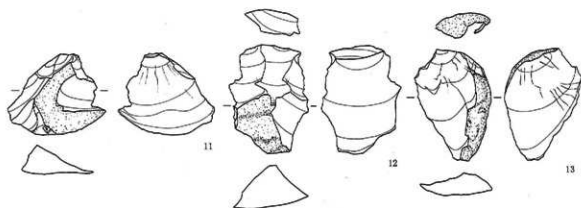
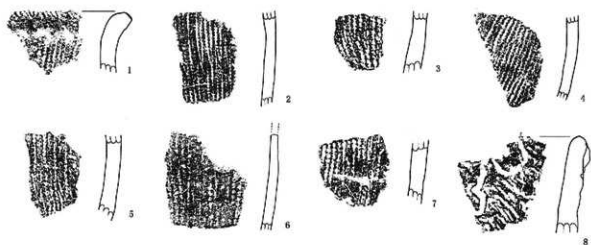


図28 その他の遺物実測図

表2 第1号住居SI001出土遺物観察表

番号	種 類	法 量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 染 色 成 調	出土層位 残存状態 注 記
1	土師器 埴	□11.2 高6.9 底-	(内) 体部横割り、口辺部横撫で、底部削り後に粗い撫で。 (外) 体~底部削り後に撫で、口辺部横撫で。 体部上位と口縁部に最大径。頸部のくびれは弱く、口辺部は直線的に僅かに外反。内面の後が明瞭。外面に多量の煤付着。被熱により磨耗し、白く変色。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 普通 (内) 淡灰色 (外) 淡灰色	1層。 口縁~体部 1/5を欠損。 SI001一括
2	土師器 埴	□11.9 高7.9 底1.5	(内) 体部横割り、口辺部横撫で、見込みに筒の当たり多数。 (外) 底~体部中位粗い撫で、体部中位~口縁横撫で。 口縁部に最大径。頸部のくびれは弱く、口辺部は直線的に僅かに外反。内面の後が明瞭。外面に多量の煤付着。被熱により磨耗し、白く変色。	小砂粒、石英粒、 火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明灰色 (外) 明灰色	6層。 口縁~体部 1/5を欠損。 SI001No17 一括
3	土師器 埴	□11.8 高6.1 底5.2	(内) 体部~口辺横撫で、見込みに筒の当たり多数。 (外) 体部中位~底部に削り、体部中位~口辺部に横撫で。 平底で口徑に対して器高が低い。口縁部に最大径。頸部のくびれが強く、口辺部は強く外反。調整が難で、器形は非常にいびつ。外面に多量の煤付着。被熱による磨耗が激しく、白く変色。	石英粒、火山岩 滓、雲母。 不良 (内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色	10層貯蔵穴 内。 ほぼ完形。 SI001No37
4	土師器 埴	□11.6 高7.2 底-	(内) 体部横割り、口辺部横撫で、見込みに筒の当たり。 (外) 体部中~下位横割り、体部中~口辺部横撫で。 口縁部に最大径。体部は下位から上位へと直線的に開く。頸部のくびれは弱く、口辺部は直線的に外反。外面に多量の煤付着。被熱で磨耗し、白く変色。	火山岩滓、雲母。 良好 (内) 淡黄褐色 (外) 淡灰色	10層貯蔵穴 内。 完形。 SI001No36
5	土師器 埴	□11.0 高8.5 底5.6	(内) 体部横割り、口辺部横撫で。 (外) 底部削り、体部横割り、頸部~口辺部横撫で。 体部中位に最大径。底部は明瞭な平底。底~体部は強い削りが施され、反るように立ち上がる。頸部はくびれる。口辺部の外反は弱く、直に立ち上がる。器面調整は非常に難。外面に多量の煤付着。被熱により磨耗し、白く変色。	火山岩滓、雲母。 普通 (内) 淡黄褐色 (外) 淡灰色	6層。 完形。 SI001No29
6	土師器 埴	□9.8 高6.2 底3.2	(内) 体部横撫で、口辺部横撫で。 (外) 体部~体部下位は粗い横割り、体部上位~口辺部に横撫で。 不明瞭な平底。底部周辺の削りが非常に粗で、器形がいびつ。頸部のくびれは弱く、口辺部は強く外反。口辺部は口縁部へと次第に開く。口唇部が突る。内面の後線は明瞭で、頸部内面に縦痕が認められる。被熱により白く変色。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 ほぼ完形。 SI001No26
7	土師器 埴	□11.6 高6.8 底-	(内) 体部横割り、口辺部横撫で。 (外) 底部~体部中位に粗い削り、体部中位~口辺部に横撫で。 体部下位に最大径。底部周辺の削りが粗で、器形がいびつ。頸部のくびれは弱く、口辺部は短く。反りが弱い。内面の後が明瞭。外面に微量の煤付着。外面に黒炭。被熱により一部白く変色。	石英粒、火山岩 滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 完形。 SI001No6一 括
8	土師器 埴	□10.7 高7.5 底-	(内) 体部横割り、口辺部横撫で。 (外) 底部~体部上位、横割り、頸部~口辺部横撫で。 体部上位に最大径。体部は底~体部上位にかけて曲線的な丸をもつ。頸部のくびれは弱く。直線的に僅かに外反。外面に微量の煤付着。被熱により白く変色。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 普通 (内) 淡灰色 (外) 淡灰色	6層。 ほぼ完形。 SI001No7
9	土師器 埴	□10.3 高6.3 底4.3	(内) 体部横割り、口辺部横撫で、見込みに多数の筒の当たり。 (外) 底部~口辺部横撫で。 体部中位に最大径。底部は不明瞭な平底。器高が低くて平たい。体部は中位の張りが強い。頸部のくびれは強く、口辺部は短く直線的に外反。外面に黒炭。被熱により全体的に白く変色。	火山岩滓、雲母。 不良 (内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色	6層。 完形。 SI001No2
10	土師器 埴	□12.0 高6.8 底-	(内) 底部横割り、体部横割り、口辺部横撫で。 (外) 底部~体部上位横割り、頸部~口辺部横撫で。 口縁部に最大径。体部は底~体部上位にかけて曲線的な丸をもつ。頸部のくびれは弱い。口辺部は僅かに外反し、直線的に立ち上がる。被熱による変色が激しい。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層貯蔵穴 内。 完形。 SI001No35
11	土師器 埴	□12.4 高5.8 底-	(内) 体部横割りで弱目状の調整痕。口辺部横撫で。 (外) 底部~体部下位は粗い削り後に撫で、頸部~口辺部横撫で。 口縁部に最大径。頸部はくびれず。体部は底部から曲線的に立ち上がり、口辺部が僅かに外反。底部周辺の削りが粗く、底の器形がいびつ。外面に黒炭。被熱による変色が激しい。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 ほぼ完形。 SI001No23

番号	種類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土 焼成 色	土 成 調	出土層位 残存状態 注記
12	土師器 埴	口10.8 高6.5 底3.8	(内) 体部横撫で、口辺部横撫で、工具の当たりの痕跡多数。 (外) 体部下位に丁寧な削り、体部上位～口辺部横削り、体部に縦積み痕。 口縁部に最大径、底部は明瞭な平底、体部は上位の張りが強く、底部から曲線的な丸みをもつ、頸部はくびれが弱く、口辺部は直線的に外反、内面の縁は明瞭、外面に黒炭、被熱による変色が強い。	小砂粒、火山岩 滓、雲母、 良好 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色		6層。 定形。 SI001No5
13	土師器 埴	口10.6 高5.8 底3.9	(内) 全面横撫で。 (外) 体部は丁寧な横削り、口辺部横撫で。 体部上位に最大径、底～体部は緩やかな曲線で開き、口辺部は僅かに内閉、被熱による変色が強い。	石英粒、火山岩 滓、雲母、 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色		6層。 定形。 SI001No.27
14	土師器 埴	口10.6 高6.1 底2.3	(内) 底部横削り、体部横撫で、口辺部刷毛目後に横撫で、工具の当たり多数。 (外) 底部～体部上位に丁寧な横削り、頸部縦位の刷毛目後に頸～口辺部にかけて横撫で。 口縁部に最大径、明瞭な平底で中央が僅かにくぼむ、体部は上位に張りをもち、底部から曲線的に立ち上がる、頸部にくびれをもち、口辺部は曲線的に外反、被熱による変色が強い。	小砂粒、火山岩 滓、雲母、 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色		6層。 定形。 SI001No.39
15	土師器 埴	口11.9 高6.5 底4.4	(内) 体部削り後にまばらな磨き、口辺部横撫で後にまばらな磨き。 (外) 体部は指頭痕の凹凸、まばらな横磨き。 口縁部に最大径、底部は明瞭な平底、体部は底部下位が僅かに反り、上位へと曲線的に立ち上がる、頸部のくびれは弱く、口辺部は直立、成形が雑で器形が極めていびつ、外面に黒炭。	砂質で粗い、石 英粒、雲母、 普通 (内) 黒褐色 (外) 褐色		6層。 ほぼ定形。 SI001No.25
16	土師器 埴	口12.4 高5.6 底-	(内) 体部に粗い横削り、口辺部横撫で、横撫で後に放射状のまばらな磨き。 (外) 底部～体部上位粗い削り、頸部～口辺部横撫で。 口縁部に最大径、頸部にくびれはなく、体部は底～頸部へと直線的に広がる、口辺部は直線的に強く外反、外面に黒炭、被熱による変色や器形の歪みあり。	砂質で粗い、石 英粒、火山岩 滓、雲母、 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色		10層貯蔵穴 内。 定形。 SI001No.24
17	土師器 埴	口10.3 高6.2 底4.14	(内) 体部横削り後に、まばらな横磨き、口辺部横撫で。 (外) 体部に指頭痕の凸凹、部分的にまばらな横磨き。 口縁部に最大径、明瞭な平底、頸部にくびれはほとんどみられず、体部は底～口辺部へと直線的に開く、成形・器面調整が雑、外面に黒炭。	砂質で粗い、石 英粒、火山岩 滓、雲母、 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色		6層。 口縁～体部 1/3欠損。 SI001No.14
18	土師器 手捏ね	口9.1 高3.6 底1.9	(内) 全面横撫で。 (外) 底部粗い削り、体部下位に指頭痕の凸凹、口辺部横撫で。 口縁部に最大径、不明瞭な平底、体部は下位～口辺部へと直線的に開く、手捏ね成形で、器厚・器形がいびつ、外面に黒炭。	砂質で粗い、石 英粒、火山岩 滓、雲母 良好 (内) 明褐色 (外) 暗褐色		6層。 定形。 SI001No.11
19	土師器 埴	口- 高- 底4.2	(内) 胴部横撫で、縦積痕が数条あり、底部に踵の当たりの痕跡多数。 (外) 胴部下位に粗い横削り、中位横削り後に横磨き、上位にまばらな斜磨き。 明瞭な平底、胴部は中位が強く張り、断面形は算盤球状を呈する。	砂質で粗い、石 英粒、火山岩 滓、雲母、 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色		1層。 胴部のみ遺 存。 SI001一括
20	土師器 高 環	口- 高- 底10.0	(内) 胴部全面に横撫で。 (外) 脚柱部～胴部に丁寧な縦磨き。 脚～胴部が直線的に開く。	石英粒、火山岩 滓、雲母、 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色		1層。 胴部のみ遺 存。 SI001一括
21	土師器 高 環	口19.1 高16.5 底16.3	(内) 坏部横撫で後に縦磨き脚柱部に縦積み痕7条、胴部へと全面に横撫で。 (外) 坏底部縦削り、体～口辺部横撫で後に丁寧な斜磨き、脚部は丁寧な縦磨き、胴部に脚部から鋭くまばらな斜磨き。 坏底部に明瞭な後縁、坏体部は上位へと直線的に開き、口辺部はやや内側に屈曲、脚部はラッパ状に開き、胴部は僅かに反る、坏部外面に煤付着、被熱による磨耗・変色が強い。	小砂粒、火山岩 滓、 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色		10層貯蔵穴 内。 胴部1/3欠 損。 SI001No.22

番号	種 器 類	法 量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 焼 成 測 定	出土層位 残存状態 備 注
22	土師器 高 坏	口17.4 高17.3 底15.1	(内) 坏部全面横撫で、脚柱部横削り、裾部横撫で。 (外) 坏底部に縦削り、体部に指頭痕の凸凹、口辺部横撫で、脚柱部に縦位磨き、脚部下位～裾部は横撫で。 坏体部は底～口辺部へと曲線的に開く、口縁部は外側へとするとく張り出し、口唇部は平坦、体部外面中に坏部の粘土を重ねた沈線が通る。脚柱部は直線的に開き、裾部近くで屈曲して「ハ」の字状に開く、坏部と脚部とは棒状粘土により接合、被熱による変色・磨耗が激しい。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 完形。 SI001Ne1
23	土師器 高 坏	口14.0 高12.9 底13.0	(内) 坏体部中位横削り、口辺部横撫で、底部中央に粗い削り、脚柱部上位に扇状の絞目、明瞭な縦積痕2条、裾部横撫で。 (外) 坏底部から体部にかけて粗い削り、口辺部横撫で、脚柱部縦削り、裾部横撫で。 坏体部は底～体部へと曲線的に反り、中位で波打ち口辺部でさらに外反、坏底部は明瞭な稜線、脚部はラッパ状に開く、坏部内・外面に黒斑。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 完形。 SI001Ne3
24	土師器 高 坏	口16.7 高14.2 底14.6	(内) 坏部は丁寧な横撫で、僅かに光沢をもつ、底部に腕の当たりの跡、脚部は縦積痕4条認められ全面撫で消し。 (外) 坏底部は撫で、坏体部横撫で後にまばらな斜位磨き、脚部は裾部へと物で強に縦磨き。 坏体部は底～口辺部へと直線的に開く、坏底部には明瞭な線をもち、脚部から裾部はラッパ状に開き、裾部の反りは弱い。	砂質で粗い、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	10層貯磁穴内。 6層。 完形。 SI001Ne30・31一括
25	土師器 高 坏	口14.4 高14.5 底12.8	(内) 坏体部中位、横削り、口辺部、横撫で、底部中央は放射状の粗い削り。脚柱部上位に扇状の絞目、明瞭な縦積痕2条、裾部横撫で。 (外) 坏底部から体部にかけて粗い削り、口辺部横撫で、脚柱部縦削り、裾部横撫で。 坏体部は底部から曲線的に反り、中位で波打ち口辺部でさらに外反、坏底部には明瞭な稜線、脚部から裾部は緩やかな曲線で、裾部の張り出しは弱い。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 裾部1/3欠損。 SI001Ne4
26	土師器 徹	口18.7 高10.2 底3.2	(内) 体部横削り、口辺部横撫で。 (外) 体部に縦・斜位の粗い削り、口辺部横撫で。 折り返し口辺で底部は穿孔式、底部から口辺部にかけて直線的に開く、外面に黒斑。	砂質で粗い、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	6層。 完形。 SI001Ne28
27	土師器 蓋	口- 高- 底-	(内) 内辺部横撫で。 (外) 頸部横撫で後に斜位の磨き、口辺部横撫で。 頸部は強くくびれ、口辺部との帯に段を有する。口辺部は長く、僅かに外反して直線的に開く、口辺部内面途中に緩やかな段をもち、受け口状を呈する。	砂質で粗い、小砂粒、石英粒、雲母。 良好 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	1層。 口辺部1/2のみ。 SI001Ne15一括
28	土師器 甕	口13.7 高15.0 底5.8	(内) 体部横削り、口辺部横撫で。 (外) 底部削り、脚部下位～中位縦削り、脚部中位横削り、肩部縦撫で(光沢おびり)、口辺部横撫で。 脚部中位に最大径、脚部は張が強い、底部は明瞭な平底、脚部は底部から中位へと曲線的に反って立ち上がる、頸部は強くくびれ、口辺部は長く直線的に開く、外面に多量の凝付着、被熱により白く変色。	火山岩滓、雲母。 普通 (内) 淡褐色 (外) 淡灰色	6層。 口辺部1/5欠損。 SI001Ne12一括
29	土師器 甕	口13.7 高6.4 底16.7	(内) 脚部横削り、口辺部横撫で、肩部に腕の工具痕が多数認められる。 (外) 脚部下位～中位縦削り、脚部上位横・斜位削り、肩部一口辺部横撫で。 脚部上位に最大径、脚部は底部から緩やかな曲線で立ち上がる、頸部はくびれが強く、肩部の張りが強い、口辺部は僅かに外反し、直線的に開く、内面に炭化物付着、被熱による変色・磨耗が激しい。	石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 淡褐色 (外) 淡褐色	6層。 完形。 SI001Ne9
30	土師器 甕	口- 高- 底-	(内) 脚部横削り後にハケ状の横撫で、口辺部は横撫で、肩部に縦積み痕多数。 (外) 脚部縦・斜位のハケ状の撫で、口辺部は横撫で 脚部中位に最大径をもち、端正な球脚、頸部はくびれが強く口辺部は曲線的に開く、内面全体が黒褐色で炭化物付着、器厚は厚く、焼成良好、被熱の度合が異なる破片が接合。	小砂粒、石英粒、雲母。 良好 (内) 黒褐色 (外) 明褐色	10層貯磁穴内。 口辺一部・脚部1/2のみ遺存。 SI001Ne8・40一括

番号	種類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土 焼色 調整	出土層位 残存状態 注記
31	土師器 甕	口- 高- 底4.5	(内) 口辺部～底部横撫で、胴部上位に一部刷毛目の痕跡。 (外) 頸～胴部下位縦刷毛目後にまばらな縦磨き、胴部下位縦刷毛目後に縦磨き。 胴部中位に最大径をもち、やや縦長の球胴。頸部は直立気味で口辺部が強く外反。胴部外面中に多量の煤付着。内面に黒斑。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	10層貯蔵穴内。 口縁・胴部を1/3欠損。 SI001No.34一括
32	土師器 甕	口19.6 高29.6 底4.4	(内) 底～胴部下位縦刷毛目後に横撫で、胴部中～上位横撫で、口辺部縦刷毛目後に横撫で、胴部上位に縦積み痕跡。 (外) 底部周縁を横削り、胴部中～下位を斜刷毛目→横削り→斜刷毛目、胴部上位～中位斜刷毛目、頸部横撫で後に斜刷毛目、口辺部横撫で。 胴部中位に最大径をもち、端正な球胴。頸部は直立し、口辺部は曲線的に強く外反。内面に炭化物付着。胴部外面に煤付着。外面に黒斑。被熱の度合が異なる破片が接合する。	小砂粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 暗褐色 (外) 黒褐色	6層。 胴部を一部欠損。 SI001No.10一括
33	甕	長10.6 幅6.9 厚4.6 重373	特に加工の跡なし。被熱による多量のひび。		1層。 SI001No.19
34	甕	長9.8 幅7.3 厚4.5 重441	側面に弱い敲打痕。		6層。 SI001No.13
35	磨石	長11.3 幅9.7 厚6.0 重810	正面中央と裏面の大部分に磨面。		1層。 SI001No.20
36	白石	長15.5 幅6.9 厚4.6 重1425	扁平。表面・裏面ともに中央部が擦れて僅かにくぼむ。側縁に被熱による磁砕が認められ、僅かに赤色化。		6層。 SI001No.18
37	礫器	長14.2 幅9.4 厚6.8 重1040	スタンプ形石器に類似。左側縁を剥離して調整。		6層。 SI001No.21

表3 第2号住居SI002出土遺物観察表

番号	種類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土 焼色 調整	出土層位 残存状態 注記
1	土師器 甕	口10.0 高5.1 底-	(内) 口辺部横磨き、体部横削り後に横撫で、見込みに粗い磨き。 (外) 底部～体部中位横削り、体部上位～口辺部横撫で。 口縁部に最大径。頸部はくびれ。体部は底部から曲線的に立ち上がる。口辺部は直線的に外反。器形は整っている。内面に炭化物付着し外面にふきこぼれの痕跡。黒斑あり。外面に煤付着。	やや砂質、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 暗褐色	2層。 完形。 SI002No.4
2	土師器 甕	口11.9 高7.1 底-	(内) 見込みに粗い磨き。 (外) 口辺部横撫で、体部に縦積み痕。 口縁部に最大径。体部は底部～中位にかけて曲線的に立ち上がり、頸部へと直立。頸部にくびれは無く、口辺部は直線的に外反。内面に炭化物付着し、外面にふきこぼれの痕跡。外面に煤付着。被熱による磨耗が激しい。	やや砂質、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 褐色 (外) 褐色	2層。 ほぼ完形。 SI002No.24一括
3	土師器 甕	口11.7 高8.1 底4.6	(内) 底～体部に平滑な横撫で、口辺部横撫で後磨き。 (外) 底～体部下位、横削り、頸～口辺部下位平な横撫で。 底部は明瞭な平底。体部中位に最大径。頸部は曲線的に強くくびれ、口辺部の長さは短い。頸部内面の稜も曲線的で口辺部は短い。内面に炭化物付着。外面に多量の煤付着。さらに器面の剥離部にも煤付着。被熱による変色がみられ、被熱の度合の異なる破片が接合。	石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層貯蔵穴内。 完形。 SI002No.26一括
4	土師器 甕	口12.1 高7.3 底-	(内) 体部に平滑な横撫で、工具の痕跡あり、口辺部横撫で後磨き。 (外) 頸～口辺部下位平な横撫で。 体部中位・口縁部に最大径。頸部は曲線的に強くくびれ、口辺部の長さは短い。頸部内面の稜も曲線的。口辺部は僅かに長い。内面に炭化物付着。外面に多量の煤付着。被熱による磨耗・変色が激しい。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 淡灰色 (外) 明褐色	2層。 完形。 SI002No.14一括

番号	積器 種類	法量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 焼 成 調	出土層位 残存状態 注 記
5	土師器 埴	口11.2 高8.3 底4.5	(内) 底～体部は極めて平滑な横撫で、工具の痕跡あり、口辺部横撫で後磨き。 (外) 底～体部下位横削り、頸～口辺部丁寧な横撫で。 底部は明瞭な平底、体部中位に最大径、頸部は曲線的にくびれ、口辺部の長さも短い、頸部内面の輪線も曲線的、口辺部は短い、内面に炭化物付着、外面に多量の煤付着、被熱による変色が激しい。	石英粒、火山岩 洋、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層貯蔵穴 内形。 S1002No27
6	土師器 埴	口13.0 高6.8 底4.4	(内) 全面横撫で後に底～体部に横磨き。 (外) 底～体部中位横削り後に横撫で、頸～口辺部横撫で。 底部は不明瞭な平底、口縁部に最大径、頸部にくびれはなく、体部は中位から直立し、口辺部は直線的に外反、成形が粗で底部周辺が凹凸し、全体的に器形がいびつ、内面に炭化物付着、被熱による変色が激しい。	石英粒、火山岩 洋、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層貯蔵穴 内形。 S1002No25
7	土師器 埴	口8.3 高9.5 底3.6	(内) 底～胴部中位を工具による平滑な撫で、胴部上位指撫で、口辺部横撫で後に縦磨き。 (外) 底～胴部下位横削り、胴部中～上位にまばらな横磨き、後にまばらな新磨き、口辺部まばらな縦磨き。 底部は明瞭な平底、胴部は中位に張りをもち、口辺部は頸部から直線的に開く、胴部内面上位に縦積みの明瞭な段を有する。	小砂粒、石英 粒、雲母。 良好 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	2層。 口縁部のみ 欠損。 S1002No1・ 3
8	土師器 埴	口7.3 高10.6 底1.5	(内) 全面撫で、底～胴部中位に工具の粗い撫での痕跡。 (外) 底～胴部下位横削り、胴部中位横磨き、胴部上位に斜位の粗い磨き。 底部は緩い曲線状の丸底、胴部は中位が強く張り「く」の字状に屈曲。	石英粒、火山岩 洋、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 口辺部のみ 欠損。 S1002No5
9	土師器 高 環	口17.5 高16.6 底14.3	(内) 坏体部下位横削り、口辺部横撫で、中央から放射状のまばらな磨き、脚柱部上位に螺旋状の絞り目、中位に工具による粗い横撫で、裾部横撫で。 (外) 坏底部粗い削り、口辺部横撫で後に体部から続く粗い縦削り、脚柱部に細かな縦削り、裾部横撫で後に脚柱部から続く縦削り。 坏底部の稜線が明瞭、体部は曲線的に反り、中位で波打つ、口辺部は直線的に開く、脚部はラッパ状に開き裾部は僅かに反る、坏部に対して裾部短い。	小砂粒、石英 粒、火山岩洋、 雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 裾部1/2欠 損。 S1002No9
10	土師器 高 環	口— 高10.1 底13.8	(内) 脚柱部上位に螺旋状の絞り目、中位に縦積み痕2条、裾部にかけて横撫で。 (外) 脚柱部に細かな縦削り、裾部横撫で後に脚柱部から続く縦削り。 脚柱部から裾部にかけて「ハ」の字状に開く。	小砂粒、石英 粒、火山岩洋。 良好 (内) 淡褐色 (外) 淡褐色	2層。 脚部のみ遺 存。 S1002No30
11	土師器 高 環	口20.2 高15.7 底16.2	(内) 坏体～口辺部横撫で、中央から口辺にかけて放射状のまばらな磨き、脚柱部に縦積み痕7条、裾部へと全面に横撫で。 (外) 坏底部横削り、体部～口辺部横撫で後に、まばらな新磨き、脚～裾部に横撫で、後にまばらな縦磨き。 坏底部に稜線なく、坏体部は底部～口辺部へと曲線的に開く、脚部はラッパ状に開く、裾部は張り出しが長く、先端が僅かに反る。	小砂粒、石英 粒、火山岩洋、 雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 坏部口縁1/3 欠損。 S1002No13 一括
12	土師器 高 環	口— 高— 底15.0	(内) 脚柱部上位の螺旋状の絞り目、下位の縦積み痕を丁寧に撫で磨き、裾部は横撫で。 (外) 脚柱部に丁寧な縦磨き、裾部横磨き。 脚部はラッパ状に開き、裾部は僅かに反る。	石英粒、火山岩 洋、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 脚部のみ遺 存。 S1002No16 一括
13	土師器 高 環	口17.0 高18.0 底15.9	(内) 脚柱部上位に粘土の絞り目、中位に縦積み痕3条、裾部横撫で、(外) 被熱による磨耗が激しい、坏底部縦削り、体～口辺部横撫で後にまばらな縦磨き脚柱部に丁寧な縦磨き。 坏底部に稜線を有す、坏体部は上位へと直線的に開き、口辺部はやや内側に屈曲、脚部はラッパ状に開き、脚柱部から裾部は緩やかに広がる、被熱による変色・磨耗が激しい。	石英粒、火山岩 洋、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 坏部1/2・ 欠損1/2を 欠損。 S1002No8
14	土師器 高 環	口18.2 高17.0 底17.0	(内) 坏部横撫で、脚柱部に縦積み痕4条、裾部へと全面に横撫で、(外) 被熱による磨耗が激しい、脚柱～裾部にまばらな縦磨き。 坏底部に明瞭な稜線、坏体部は上位へと直線的に外反し、口辺部はやや内側に屈曲、脚部はラッパ状に開き、裾部は反りが強い、坏部外面に黒斑、脚部外面に微量に煤付着、脚部内面に多量の煤付着、被熱による変色・磨耗が激しい。	火山岩洋。 不良 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 坏部1/3を 欠損。 S1002No22 一括

番号	種 類	法 量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 成 調	出土層位 残存状態 注 記
15	土師器 高 環	口— 高— 底16.8	(内) 脚柱部に紐痕み痕4条、工具による横撫で、裾部横撫で。 (外) 脚柱部は縦削り後にまばらな縦磨き、裾部横撫で後に脚部から縦く縦磨き。 脚柱部の径が太い、裾部は束広がりて全体的に平たい、内面に微量の煤付着。	石英粒、火山岩 滓。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	1層。 脚部のみ遺存。 SI002No.40 一括
16	土師器 高 環	口17.0 高— 底—	(内) 坏部全面撫で後に、全面を密に横磨き。 (外) 坏底部横撫で、刷縁部を削りて面取り、体〜口辺部横撫で後にまばらな縦磨き。 坏部と脚部との接合は棒状粘土により連結、坏底部に明瞭な接合をもち、刷縁部には坏体部の粘土を貼り合せたカエリを残す、坏体部は口辺部へと直線的に開く、体部外面に黒炭、底〜体部外面に多量の煤、内面に微量の煤付着。	小砂粒、石英 粒、火山岩滓、 雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 坏部のみ遺存。 SI002No.2・ 3・6
17	土師器 器 台	口— 高9.65 底—	(内) 受部横撫で、脚柱部、紐痕み痕5条、全面横撫で。 (外) 受部撫で後に刷毛目、脚部撫で後に受部から縦く縦刷毛目。高環を応用した器台、坏体部、脚部を破砕し、破砕部を磨き「丁」字状を呈する、受部の外面刷縁部には、高環製作時における、体部と接合する際の粘土のカエリを残す、脚部外面に煤付着、被熱による磨耗・変色が激しい。	小砂粒、石英 粒、火山岩滓、 雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 受部撫で。 SI002No.32 一括
18	土師器 壺	口14.2 高16.3 底—	(内) 胴部に工具を用いた極めて平滑な横撫で、口辺部横撫で。 (外) 全面横撫で。 胴部中に最大径をもち、球脚を呈する、頸部はくびれをもち、口辺部は僅かに直立して外反、内・外面ともに少量の煤付着、被熱による磨耗・変色が激しい、被熱の度合の異なる破片が接合。	火山岩滓、雲 母。 不良 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 底部を欠損。 SI002No. 23・2一括
19	土師器 壺	口17.2 高19.7 底5.0	(内) 底〜胴部、横削り後に横撫で、口辺部横撫で。 (外) 胴、口辺部に工具によるハケ状の細かな縦撫で 胴部中位やや底部側に最大径をもち下膨れ気味、頸部は僅かにくびれ、口辺部は曲線的に外反、外面に煤が多く付着、胴部内面に紐痕み痕、頸部の後縁が明瞭。	小砂粒、石英 粒、雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	2層。 1/2遺存。 SI002No.17 一括
20	土師器 壺	口13.7 高24.9 底6.6	(内) 底〜胴部に工具による丁寧な横撫で、底部に放射状、胴部にまばらな縦磨き、口辺部横撫で。 (外) 体部下位縦削り後に縦磨き、体部中位横削り後にまばらな縦磨き、体部上位〜口辺部横撫で。 胴部中に最大径、胴部は底部から反るようになり立ち上がり、下位から頸部にかけて修整な球脚部、口辺部は厚手で直線的に開く、口唇部は斜めに面取り、底部内面に炭化物付着、黒炭あり、肩部に紐痕み痕2条、外面に多量の煤付着。	雲母。 良好 (内) 褐色 (外) 暗褐色	2層。 ほぼ定形。 SI002No.21 一括
21	土師器 壺	口14.1 高27.0 底7.4	(内) 底部に不定方向の工具による刷毛目状の撫で、胴部横撫で、口辺部横撫で後まばらな縦磨き。 (外) 底部横撫で、胴部全面に丁寧な縦磨き、口辺部撫で後にまばらな縦磨き。 胴部中に最大径、胴部は底部〜下位の反りが強い、胴部中に強い張りをもち、胴部下位〜中位・中位〜上位は直線的、口辺部は幅広く、直線的に開く、口唇部は斜めに面取り、外面に多量の煤付着、黒炭あり、紐痕み痕の剥離面にキザミが確認される。	小砂粒、火山岩 滓、雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 淡褐色	2層。 胴部を一部 欠損。 SI002No.12 一括
22	土師器 壺	口19.6 高28.0 底4.4	(内) 全面に丁寧な横撫で。 (外) 胴部にハケ状の細かな縦撫で、口辺部横撫で。 胴部中に最大径、胴部は底部から中位にかけて直線的に立ち上がり、頸部へと曲線的にくびれる、口辺部は曲線的に外反、内面に多量の炭化物付着、外面に煤付着。	小砂粒、石英 粒、火山岩滓、 雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 明褐色	2層。 口辺部1/3 を欠損。 SI002No.17
23	土師器 壺	口19.0 高29.6 底7.2	(内) 底〜胴部下位横刷毛目、胴部中〜上位、工具による横撫で、口辺部横刷毛目後に横撫で。 (外) 底部刷縁を横削り、胴部下位横刷毛目後に縦刷毛目、胴中〜上位斜刷毛目、胴〜口辺部刷毛目後に横撫で。 胴部中に最大径、胴部は底部〜中位がやや直線的で、頸部へと曲線的にすぼまる、頸部は直立し、口辺部は曲線的に外反、内面に多量の炭化物付着、外面に多量の煤付着。	小砂粒、雲母。 普通 (内) 暗灰色 (外) 暗褐色	2層。 胴部1/3欠損。 SI002No.7一 括
24	土師器 壺	口20.1 高30.6 底—	(内) 底〜胴部下位、横刷毛目、胴部中位〜上位横削り、口辺部横刷毛目後に横撫で。 (外) 底部刷縁部を横削り、胴部横削り後に斜刷毛目、口辺部刷毛目の後に横撫で。 胴部中に最大径をもち、修整な球脚を呈する、頸部は直立気味に立ち上がり、口辺部は曲線的に強く外反、口唇部は斜めに面取り、内面に炭化物付着、胴部外面に黒炭。	小砂粒、石英 粒、火山岩滓、 雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 明褐色	2層。 胴部を一部 欠損。 SI002No.15 一括

番号	種 類 器 種	法 量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 焼 色 成 調	出土層位 残存状態 注 記
25	土師器 甕	口22.5 高32.2 底5.4	(内) 底～胴部下位横刷毛目、胴部中位～上位横撫で、胴部上位横削り、口辺部横刷毛目後に横撫で。 (外) 底部周縁部を横削り、胴部下位～中位に斜刷毛目を施し紐紋み部に粘土を重ね、さらに斜刷毛目、胴部上位に斜刷毛目、口辺部刷毛目後に横撫で。 胴部中位に最大径をもち、端正な球胴を呈する。口辺部は曲線的に外反、内面に炭化物付着、外面に煤付着、被熱による器形の歪みが認められ、磨耗・変色が激しい、被熱の度合の異なる破片が接合。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 口辺部1/3欠損。 SI002 №20・21一括
26	土師器 甕	口19.6 高3.4 底6.8	(内) 底～胴部全体に斜刷毛目、口辺部横撫で。 (外) 胴部全面に斜刷毛目後に縦撫で、口辺部横撫で。 胴部中位に最大径をもち、端正な球胴を呈する。口辺部は曲線的に外反、口唇部は斜に面取り、底部に木炭痕、内面に炭化物付着、外面に煤付着、黒斑あり、目の粗い刷毛目器具を使用。	小砂粒、石英粒、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 暗褐色	2層貯蔵穴内。 胴部1/5欠損。 SI002№6
27	土師器 甕	口16.0 高33.2 底6	(内) 底～胴部全面に横刷毛目、口辺部横撫で。 (外) 胴部下～中位縦削り、胴部上位横削り、口辺部横撫で。 胴部中位に最大径、底部は突出気味で、胴部には明瞭な段をもち、胴部は底部～中位へと直線的に立ち上がり、頸部へと曲線的にすばまる。口辺部は直線的に開く、胴部外面に多量の煤付着。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 1/2欠損。 SI002 №11・12一括
28	台 石	長18.3 幅10.2 厚6.7 重1625	両面ともに縦方向の擦痕。		2層。 SI002№33
29	鉄製品 刀子	長一 幅1.4 厚0.5 重15	平棟平造り、基部は丸みをもつ。		1層。 基部残存。 SI002一括

表4 第3号住居SI003出土遺物観察表

番号	種 類 器 種	法 量 (cm)	技 法 ・ 特 徴	胎 土 焼 色 成 調	出土層位 残存状態 注 記
1	土師器 環	口12.8 高3.3 底一	(内) 全面に横書き。 (外) 磨耗が激しい、底～体部横削り、口辺部横撫で。 半球状の丸底、口径に対して器高が浅い、口辺部は僅かに内湾。	石英粒、火山岩滓、雲母、良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	1層。 口辺部1/3欠損。 SI003一括
2	土師器 鉢	口15.0 高9.8 底一	(内) 全面に丁寧な横撫で。 (外) 底～体部横削り、口辺部横撫で。 体部上位に最大径、底部は平底気味の丸底、体部は上位から口辺部にかけて強く内湾、体部内面上位には、僅かに段が認められる。	石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	2層。 2/3欠損。 SI003№2・15一括
3	土師器 甕	口22.5 高33.7 底6.3	(内) 底～胴部中位縦撫で、胴部中位～口辺部横撫で。 (外) 底部粗い横削り、体部下位から胴部の方向へ、粗い縦削り、口辺部は削り後に横撫で。 長胴型、口縁部に最大径、頸部はくびれずに口辺部が曲線的に外反、胴部は底部へと直線的にすばまる、被熱による磨耗・変色が激しい、外面に黒斑。	石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	2層。 1/3欠損。 SI003№1・3・4・9・15一括
4	土師器 甕	口一 高一 底5.4	(内) 底～胴部下位に不定方向の撫で。 (外) 体部縦削り後に縦撫で。 長胴型、底部に木炭痕。	火山岩滓、雲母、良好 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	1層。 底部のみ。 SI003一括
5	甕	長8.4 幅6.7 厚3.2 重250	加工痕なし、頸縁に被熱による破砕、被熱による赤色化。		1層。 SI003№8
6	甕	長14.0 幅6.7 厚5.5 重620	両面に縦・横の鋭利な擦痕、正面中央に磨面、頸縁に弱い敲打痕。		1層。 SI003№7
7	甕	長13.0幅6.4 厚4.7 重543	特に加工なし、一部被熱により赤色化。		1層。 SI003№6

表5 第4号住居S1004出土遺物観察表

番号	種器類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土成調	出土層位 残存状態 注記
1	土師器 環	口10.9 高3.9 底-	(内) 全面に丁寧な横撫で。 (外) 底～体部に不定方位の粗い削り。口辺部横撫で。 体部と口辺部に明瞭な線をもち、口辺部は外傾し、口縁部は僅かに内湾。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	1層。 口辺部1/4欠損。 S1004No1・2一括
2	土師器 甕	口19.0 高- 底-	(内) 胴～口辺部横撫で。 (外) 胴部粗い縦削り。口辺部横撫で。 長胴甕。口縁部に最大径。頸部にくびれなし。口辺部は短く、強く外反。胴部は底部へと直下。被熱による磨耗・変色が激しい。	小砂粒、石英粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	1層。 口辺～胴部中位が1/2遺存。 S1004No8
3	土師器 甕	口23.2 高- 底-	(内) 全面横撫で。 (外) 胴部横削り。胴～口辺部横撫で。 球胴甕。胴部から頸部へと曲線的にくびれ。口辺部は緩やかに外反。胴部の器厚は薄く、口辺部は厚手。被熱による磨耗・変色が激しい。	小砂粒、火山岩滓、雲母。 普通 (内) 明褐色 (外) 明褐色	1層。 口辺～胴部中位1/3遺存。 S1004No7一括
4	環	長12.3 幅6.2 厚3.6 重418	加工痕なし。被熱により赤色化し緑線に熱によるはじけ。		1層。 S1004No3
5	環	長12.9 幅7.1 厚5.5 重664	被熱により全体に赤色化。上端に弱い敲打痕。		1層。 S1004No6

表6 第5号住居S1005出土遺物観察表

番号	種器類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土成調	出土層位 残存状態 注記
1	須恵器 環 壺	口- 高4.0 底-	(内) ロクロ撫で。 (外) ロクロ撫で。 宝珠状つまみのかえり付杯蓋。外面全体に自然釉が付着。生産地は東海系(飯投産)の可能性が高い。	白色・黒色粒微集。 良好 (内) 淡灰色 (外) 淡灰色	複乱土中。 2/3遺存。 S1005一括
2	土師器 環	口12.5 高4.3 底2.0	(内) 横撫で後に横磨き。 (外) 底～体部横削り後に横磨き。口辺部横撫で。 半球状の丸底。口径に対して器高が浅い。口辺部が僅かに内湾。口辺部に塗層が付着。	火山岩滓、雲母。 良好 (内) 明褐色 (外) 明褐色	1層。 口辺部1/2欠損。 S1005No1グリップド一括

表7 第1号古墳出土遺物観察表

番号	種器類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土成調	出土層位 残存状態 注記
1	石製模造品 鎌形	長- 幅1.4 厚0.5 重4 孔径0.2	断面形は板状。両面に斜位の粗い捺痕。棟部は平坦に研磨されるが、彫削工程のハツリ面を残す。刃部は両面から丁寧に研磨され尖り気味。柄との装着部は折り返しが表現され、穿孔あり。	暗緑灰色 (10GY3/1)	石棺内腹土。先端部を欠損。第1号古墳一括
2	鉄製品 刀子	長9.1 幅1.0 厚0.4 重9	平棟平造り。棟間・刃間ともに緩やかに広がる。基部は棟脚へと収束して先端が尖る。		石棺内腹土。変形。第1号古墳一括
3	鉄製品 刀子	長9.1 幅1.0 厚0.4 重9	平棟平造り。棟間は緩やかに広がり、切先へと直線的に収束。刃間は認められず刃部は曲線的。基部に木質が残存。		石棺内腹土。変形。第1号古墳一括

表8 その他の遺物 遺物観察表

番号	種類	法量 (cm)	技法・特徴	胎土 焼色 土成調	出土層位 残存状態 注記
1	縄文土器 深鉢		(内) 横撫で。 (外) 口唇部外縁に無節Rの縄文を横位に施文。頸部に右下がりの指頭圧痕を等間隔に施文。胴部は摩滅により原形不明。 口縁部は強く外反し、口唇部は肥厚、非草式。	砂粒を多量。 良好 暗褐色	SI005 (1層)。 SI005一括
2	縄文土器 深鉢		(内) 縦撫で。 (外) 無節Lの捻糸文を縦位に施文。 原形は細く、条間が広い、非草式。	砂粒・雲母を微量。 やや良好 暗褐色	SI004 (①層)。 SI004掘方 一括
3	縄文土器 深鉢		(内) 摩滅により不明。 (外) 胴部に無節Rの捻糸文を縦位に施文。 原形は太く、条間が広い、非草式。	砂粒を多量。 良好 褐色	SI001 (1層)。 SI001一括
4	縄文土器 深鉢		(内) 撫で。 (外) 無節Lの捻糸文を縦位に施文。 原形は細く、条間が広い、非草式。	砂粒・雲母を微量。 良好 暗褐色	SI004 (①層)。 SI004掘方 一括
5	縄文土器 深鉢		(内) 横撫で。 (外) 胴部に無節Lの捻糸文を縦位に施文。 原形は太く、条間が広い、非草式。	砂粒を多量 良好 褐色	IA-94グ リッド一括
6	縄文土器 深鉢		(内) 縦撫で。 (外) 捻糸文を縦位に施文。摩滅により原形不明、非草式。	砂粒・石英を微量。 やや良好 褐色	SI005 (1層)。 SI005一括
7	縄文土器 深鉢		(内) 不定方向の撫で。 (外) 無節Rの縄文を縦位に施文。 内面に紐痕あり、非草式。	砂粒・石英を微量 良好 暗褐色	SI005 (1層)。 SI005一括
8	縄文土器 深鉢		(内) 撫で。 (外) 縦位施文の無節L縄文を地文。波頂部に沈線をともなう隆帯と波状の沈線が垂下。壺之内I式。	砂粒を微量。 良好 黒褐色	SI005 (1層)。 SI005一括
9	石 織	長1.1 幅1.3 厚0.4 重1	平面形態が二等辺三角形の無茎織。全面に押圧剥離を施す。基部は凹基で、換りは浅い。	チャート	1号墳裏込 め内。 1号墳一括
10	異形石器	長2.9 幅1.7 厚0.5 重1	左側縁に折れ面、折れ面を打面として、両面に押圧剥離が施される。裏面には主要剥離面がみられる。	黒曜石	SI001 (1層)。 SI001一括
11	剥片	長4.3 幅5.1 厚1.6 重27	打面は破損。上端の剥離は、剥片剥離時の破損。	安山岩	SI001 (1層)。 SI001一括
12	剥片	長5.7 幅4.2 厚2.7 重42	単剥離面に打面、表面が厚いバテナで覆われている。	安山岩	SI002 (1層)。 SI002一括
13	剥片	長5.4 幅4.1 厚0.7 重28	礫表面に打面、末端フェザーエンド。正面左側縁上部を欠損、表面が厚いバテナ (0.5mm) で覆われている。剥片14と接合。	安山岩	SI005 (1層)。 SI005一括
14	剥片	長8.8 幅5.0 厚2.2 重96	礫表面に打面、末端フェザーエンド。正面左側縁に二次加工。表面が厚いバテナで覆われている。剥片13と接合。	安山岩	SI005 (1層)。 SI005一括
15	剥片		剥片13と剥片14との接合。		SI005 (1層)。 SI005一括

第5章 まとめ

今回の調査において、遺構としては竪穴住居5軒、古墳(円墳)1基、掘立柱建物1棟、欄列1条、土坑1基、小穴群2箇所を、遺物としては土師器、須恵器、剥片、鏝、異形石器、鉄刀子、石製模造品を検出した。以下では、これらの遺構、遺物の概要を時代別に記すと共に、竪穴住居の中でも特に遺物出土量の多かった焼失住居における遺物の性格、および集落と古墳との関係についての所見を記してまとめる。

1 各時代の概要

(1) 旧石器時代

定型石器ではないが剥片が数点検出された。今回の調査では、旧石器時代を対象とした調査は実施しなかったが、検出された剥片は竪穴住居覆土からの出土が多く、竪穴住居構築時に掘上げられた可能性が高い。剥片は調査区西側の低地を隔む台地縁部からの出土する傾向が認められた。

(2) 縄文時代

この時代の所産と確定し得る遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器片、石鏝、異形石器が検出され、土器片は早期の撚糸文系が多く認められた。土器片の分布は調査区南西隅に多く認められ、旧石器時代遺物の分布域とほぼ重なる状況を示していた。

第4号竪穴住居SI004は貼床構築土中に撚糸文系の土器片が混入しており、その下層から住居に先行する土坑SK001が確認された。土坑SK001内から遺物は出土しなかったが、検出状況から判断すると、縄文時代早期に位置付けられる遺構の可能性も考えられる。

(3) 古墳時代

検出された竪穴住居5軒および第1号古墳が該当し、今回の調査区において主体的であった。

なお、第1号掘立柱建物SB001、第1号欄列SA001は遺構に帰属する遺物が検出されず、遺物による遺構の時期特定は不可能であったが、遺物の主軸の方向から判断して古墳時代の建物に位置付けた。

A 竪穴住居

第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002は、ともに焼失住居跡で、両者の覆土には多量の炭化材粒と焼土粒が混入していた。遺物の出土状況についても両住居共に貯蔵穴周辺から集中して土師器が出土し、それらは概ね被熱による二次焼成を受けていることが認められた。

両竪穴住居から出土した土師器は、全てが住居生活に帰属した形で用いられたとは考え難い量を示しており、住居が焼失する前に外部から持ち込んだ土器を貯蔵穴周辺に集中させたものと思われる。出土した土器の年代は、概ね5世紀中葉に比定し得る。

第3号竪穴住居SI003、第4号竪穴住居SI004および第5号竪穴住居SI005は、いずれも北壁中央部分に竈が付設されており、炉を備えた第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002よりも後出する時期の所産である。各住居からの遺物出土量は、第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002に比べ乏しかった。

第3号竪穴住居SI003は、竈前面を除く壁際を貼床し、住居内に主柱穴を設けない構造で、貯蔵穴も認められなかった。出土遺物は7世紀中葉に比定される。

第4号竪穴住居SI004は、壁際全周を貼床し、主柱穴4口、竈の東側に貯蔵穴を設ける構造で、出土遺物は7世紀前葉に比定される。

第5号竪穴住居SI005は、ローム面を床面とし、住居内に主柱穴、貯蔵穴を設けない構造であった。出土遺物が極めて少なかったものの、7世紀後葉に比定される返りを有する須恵器坏蓋が1点出土した。この須恵器の産地は東海系に求められる。

上に述べた竪穴住居5軒を、出土遺物の年代に基づいて古い順から並べると、SI001・SI002→SI004→SI003→SI005へと変遷する。それと併行して、竪穴住居の構造・機能においては、炉の消滅から竈の出現(SI004)→主柱穴・貯蔵穴の消滅(SI003)→貼床の消滅(SI005)へと変化する傾向が認められる。

B 古墳

第1号古墳(円墳)は墳丘部分と周溝の一部が完全に削平されており、周溝内から遺物の出土は認められなかった。主体部は箱式石棺が構築され、石棺内覆土より鎌形の石製模造品1点と刀子2点が検出された。

鎌形の石製模造品は、柄の装着部に折り返しが見られ、鉄鎌の形態を忠実に模倣して製作されたと考えられる。築造時期を確定しうる副葬品は伴っていなかったが、古墳の築造された位置からは、調査区北側に展開する磯岡北古墳群の一部を構成する円墳であると判断され、磯岡北古墳群の成立年代とされる5世紀中葉に位置付けられる。

当調査区における竪穴住居と古墳との関係については、住居形態や中軸線の傾き、各遺構からの出土遺物等を検討した結果、5世紀中葉において第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002が併存する可能性が指摘でき、さらに、新たに確認された第1号古墳の築造年代も、両住居と近似する時期に位置付けられる。従って、古墳と竪穴住居とが併存していた可能性が高く、調査区北側に展開する磯岡北古墳群も含め、古墳の築造と集落の形成とが密接に関わっていたものと推察される。それ以降の状況については、竪穴住居が単発に散在する程度にとどまり、大規模な集落が展開するような傾向は見受けられず、居住域としての利用は少なくなるようである。

なお、調査区中央部には、古墳1基(磯岡北古墳群、9号墳)とそれに隣接する竪穴住居跡1軒が平成13年度にセンターにより確認されている。現在、この調査に係わる成果は整理・報告書作成中であり、今回検出した遺構との具体的な関係については、詳細が分かり次第、比較検討する必要がある。

2 焼失竪穴住居と出土土器の性格

本遺跡の中心をなす第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002の2軒は、共に焼失により機能が停止していた。さらに、出土遺物には多数の土師器が検出され、遺構の検出状況からも、居住空間として機能していたとは判断し難い特異性を示していた。以下では焼失住居の性格について若干の所見を述べる。

(1) 住居の特徴

第1号竪穴住居SI001、第2号竪穴住居SI002に共通する特徴は、一辺約9mと規模が大きく、床面積、中軸線の傾きがほぼ一致することである。

住居の掘り方に関しても、中央部は硬質ロームの地山を床面として鳥状に残し、壁際に沿って周囲に貼床を巡らすなど、同じ工法を採っているほか、内部施設についても主柱穴4口、間仕切り溝を有し、住居中央部やや北側よりに炉が設けるなどの共通点が認められる。

炉の形態は長円形を呈し、両住居ともに明瞭な火床部は認められず、覆土内に微量の焼土粒と炭化材が混

入している程度であった。このことから、長期に使用したとは想定し難く、加えて、床面に硬化面が検出されなかったことも併せ考えると、住居の存続期間は短期間であったと推定される。

兩住居間での相違点は、主柱穴の深さ、掘り方の深さ、即ち住居の基礎部分において顕著に現れていた。主柱穴の掘り込みは、第1号竪穴住居S1001では80cm前後であるのに対して、第2号竪穴住居S1002では40cm前後を示し、上屋を支えた部分の強度に対する認識は、双方に大きな隔たりが認められる。

床面掘方の工法においても、前者は壁際を垂直に掘り込んで一周するのに対し、後者はなだらかで浅く掘り込まれ、部分的に掘り込まない箇所も認められた。以上の点から、兩住居はほぼ同規模でありながら、住居構築における力の入れ方は、第1号竪穴住居S1001に比べ第2号竪穴住居S1002は簡素に見受けられた。

しかし、遺物検出時の所見からは、兩住居共に長期間存続した可能性は低いと考えられ、さらに、焼失により機能が停止していた状況に基づくと、遺構より把握された建物強度の差異が、住居の存続期間に結び付くような結果は得られなかった。

(2) 遺物集中域の様相と背景

兩住居において多量の土師器が集中して出土した。貯蔵穴周辺から集中して出土する傾向は同様であったが、第1号竪穴住居S1001に関しては、貯蔵穴3口を検出しながらも、遺物が集中するのは入口柱穴脇に位置するP7に限られた。全てを一概に貯蔵穴と認識することには問題があると思われるが、いずれの覆土からも焼土の混入が認められ、焼失時には貯蔵穴全てが機能していたと判断することができるので、土器が集中する位置に何らかの意図が感じられる。

土器を集中させることを裏付ける事象として、検出された壺の中で南北に離れた地点間での接合関係が認められた(壺30)。この資料は、焼失時に被熱していることから、住居が機能していた段階ですでに移動していたものと判断され、土器を集中する行為を認識することができる。この場合、破損している土器の移動であることから、土器の集中は廃棄行為である可能性が高いと推定される。

その他の例として、双方の住居から出土した土器の中で、被熱の度合の異なる破片が接合する例が多く認められ、焼失時にはすでに破損した状態であったことを窺い知ることができる。

土器が破損してから被熱するまでの過程を可能な限り列挙すると、以下の状況が考えられる。

- 1：廃棄時の衝撃による破損→焼失時の被熱
- 2：意図的な破壊による破損→焼失時の被熱
- 3：建物倒壊による破損→焼失時の被熱
- 4：焼失中に外部から投げ入れた時の衝撃による破損→焼失時の被熱
- 5：意図的な破壊による破損→焼失中に外部から投げ入れる→焼失時の被熱

建物の焼失が意図的な行為によるものか否かは判断し難いが、土器が貯蔵穴周辺から集中して出土する状況から判断すると、焼失中に外部から投げ入れることは困難と考えられ、特に、第1号竪穴住居S1001は3口ある貯蔵穴内の1箇所だけに集中し、外部から投げ入れた状況とは程遠い様相と考えられる。

また、出土する土師器は完形が多数を占めており、意図的な破壊は見受けられない。以上の諸点から出土状況、遺物の特徴を検討すると、建物内の特定の場所で土器を廃棄した、1の状況を想定するのが妥当と考えられる。

また、土器の分布と建物空間との関係に着目すると、第1号竪穴住居S1001では、入口柱穴脇の貯蔵穴、第2号竪穴住居S1002では南西隅の貯蔵穴からの出土が特に多く認められたが、この脇には小穴(P5)が位置している。これを入口柱穴として解釈するならば、廃棄行為は入口に近い貯蔵穴で実施されたことにな

る。建物入口と廃棄行為とを結びつける以前に、貯蔵穴が入口近くに設置された要因を検討する必要性が求められるが、ここでは入口空間と廃棄行為との関連性を指摘するに止めたい。

出土した土器のうち主な器種に限って器種組成の比率を挙げると、第1号壑穴住居SI001では壑が53%、坏19%、甕16%で、壑が占める比率が高い。一方、第2号壑穴住居SI002では壑が22%、高坏30%、甕30%を占め、高坏の比率が高い。土器の年代は、器種組成、形態などから判断して両住居ともに権現山・百目鬼遺跡Ⅱ期に併行することから、5世紀中葉に位置付けて大過ない。

両住居での器種組成の傾向は異なっていたが、土器の胎土・技法の共通性を基に分類した組合せから見ると、複数の壑と小型の甕とからなる組合せ群が、1軒の住居から複数群出土する状況が認められた。各群を構成する土器は、それぞれ同時期に製作された一群と考えられる。他群との関係については実際に混在して使用されていたのか、もしくは所有者を明確に区別していたのかを判断することは不可能である。

しかし、群を成す組合せが複数存在すること、住居1軒に対する土器の出土量が多いことから判断すると、土器は住居に帰属せず、所有者の異なる外部の者が持ち寄ったと想定するのが妥当と考えられる。従って、土器を持ち込む行為と、土器の廃棄行為とが何を媒介として関連付けられるのかを今後検討することが必要と考えられる。

3 磯岡北古墳群との関係

(1) 第1号古墳の位置付け

調査により、調査区北方に隣接する磯岡北古墳群と関連を有した遺跡であることが明らかになった。磯岡北古墳群は、「東谷・中島地区」において広範囲にわたる古墳の築造と集落形成を促進したとされる笹塚古墳の築造を契機とし、築造が開始された古墳群である。古墳は9基が検出されており、TK208型式に併行する須恵器が検出されていることから、5世紀中葉に成立した古墳群と考えられている（センター年報2002）。

そのうち9号墳は、埋没谷を挟んだ南側に当る本調査区内に築造されていることから、古墳群は本調査区内へと広がっていたと考えられていた。

今回の調査で第1号古墳が発見され、それを裏付ける結果となった。墳丘が削平されていたために、現況での確認は困難であったが、磯岡北古墳群9号墳と同一台地面に築造されていることから、磯岡北古墳群に追加されることになる。

周辺の地形を考慮すると、古墳がさらに周辺へと展開する状況は認められないことから、磯岡北古墳群の南限を示す古墳であると推定される。墳丘規模は径7.6mの小規模な円墳ながら、埋葬施設の箱式石棺が良好に遺存し、副葬品として鎌形の石製模造品1点、刀子2点が検出された。磯岡北古墳群においてはこれまでに主体部の検出例は皆無であることから、第1号古墳の発見は、今後当古墳群を検討する上で重要な検出例と言える。

因みに、磯岡北古墳群において最大規模を有する2号墳は、墳丘径18.4mの円墳であり、副葬品として鉄剣、鉄鏃、鉄鉾、鉄斧が出土している。墳丘規模、副葬品において第1号古墳よりも優位性を示しており、古墳群内における階層を窺い知ることができる。

(2) 住居群との関係

今回の調査で検出した壑穴住居のうち中核的な位置を占める第1号壑穴住居SI001、第2号壑穴住居SI002

は、土器の特徴から、共に権現山・百目鬼遺跡Ⅱ期併行の5世紀中葉に位置付けられ、磯岡北古墳群と極めて近い時期に成立していたことが認められる。

古墳群と集落との成立時期の前後関係までは言及し得ないが、竪穴住居は調査区北方の埋没谷を臨む台地縁辺部に構築され、古墳群の南限と重なっていたことから、今回の調査区は、集落(竪穴住居群)と古墳群とそれぞれの占領域域が重なり合う所に位置しており、双方が有機的に関連していた可能性は十分に考えられる。集落を構成する竪穴住居群が、古墳群の密集する北方へと展開していたかは今後の報告を俟たなければならないが、古墳群と竪穴住居群とは、埋没谷を挟むことで地形的に占領域域を分離しようとする意図があったように少なからず感じられる。

文献目録

- 池田敏宏 1999『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第223集 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 石部正志 2003『塚山西古墳・塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 1996『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集 宇都宮市教育委員会
- 岩淵一夫 1984『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 1987『花の木町遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第83集 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 清水正孝 2002『西刑部古原原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第46集 宇都宮市教育委員会
- 田代己佳 2001『古蹟Ⅰ・Ⅱ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第247集 栃木県教育委員会・栃とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁 1995『栃木県における6・7世紀の土器編年と地域の特徴』『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 津野 仁・谷中 隆・森嶋秀一・江原 英・篠原祐一 1998『寺野東遺跡Ⅴ』栃木県埋蔵文化財調査報告第209集 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 栃木県教育委員会 1968『栃木県生産遺跡分布調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第89集
- 栃木県教育委員会・栃とちぎ生涯学習文化財団 2001『松山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第259集
- 栃とちぎ生涯学習文化財団・埋蔵文化財センター 2002『栃とちぎ生涯学習文化財団・埋蔵文化財センター年報』第12号
- 中村享史 2004『東谷・中島地区遺跡群4』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 栃木県教育委員会・栃とちぎ生涯学習文化財団
- 橋本澄郎・藤田典夫・谷中 隆・勝 征和・大島美智子 2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・栃とちぎ生涯学習文化財団
- 初山孝行・青柳平人・谷中 隆・江原 英 1997『寺野東遺跡Ⅵ』栃木県埋蔵文化財調査報告第201集 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 藤田典夫・安藤美保 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第241集 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 塙 静夫 2000『探訪とちぎの古墳』随想舎
- 藤田直也・田代 隆 2002『東谷・中島地区遺跡群2』栃木県埋蔵文化財調査報告第265集 栃木県教育委員会・栃とちぎ生涯学習文化財団
- 築木 誠 1998『栃木県における古墳時代中期の土器様相』『ムラ・まつり・古墳』栃木県立なす風土記の丘資料館 第6回企画展 栃木県立なす風土記の丘資料館

挿図作成

- 図2 栃木県教育委員会・勤とちぎ生涯学習文化財団（2004）付図1（墨版）に、独立行政法人都市再生機構による市街化予想図（青版）を重ねて作成。
- 図3 国土地理院発行 1/25,000地形図「上三川」（NJ-54-30-2-1）（墨版）に、栃木県教育委員会・勤とちぎ生涯学習文化財団（2004）第10図に示された遺跡の分布範囲を重ねて作成。

圖 版

図版2 第1号竪穴住居SI001

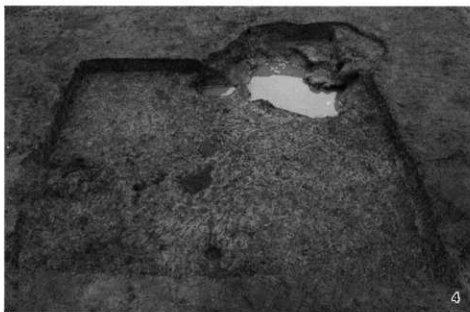
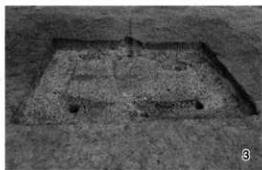
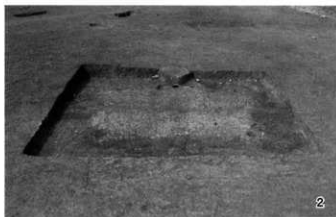
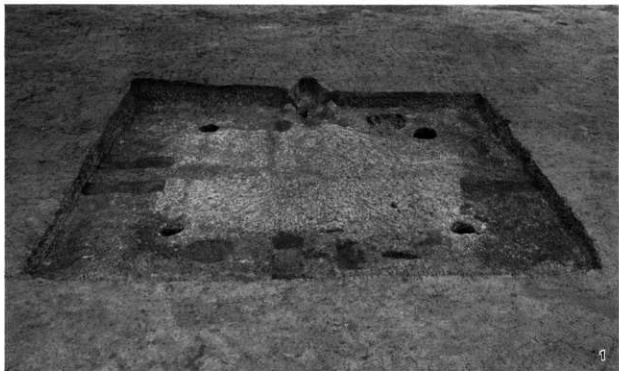


- 1 完掘（南から）
- 2 貼床除去後の状況（南から）
- 3 遺物出土状況（南から）
- 4 遺物出土状況（南壁隅中央・南東から）
- 5 遺物出土状況（北壁隅中央・南から）
- 6 遺物出土状況（西壁隅・北西から）

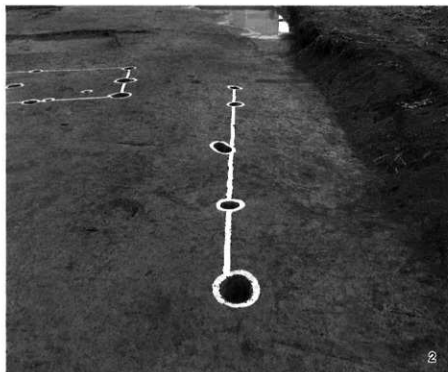
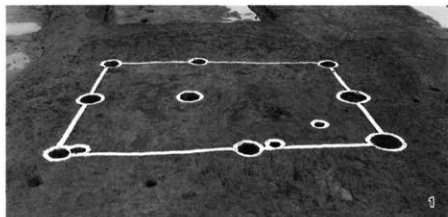


- 1 第2号竖穴住居 (SI002) 完掘 (南から)
- 2 第2号竖穴住居 (SI002) 貼床除去後の状況 (南から)
- 3 第2号竖穴住居 (SI002) 遺物出土状況 (南から)
- 4 第2号竖穴住居 (SI002) 遺物出土状況 (南西隅・南から)
- 5 第3号竖穴住居 (SI003) 完掘 (南から)
- 6 第3号竖穴住居 (SI003) 貼床除去後の状況 (南から)

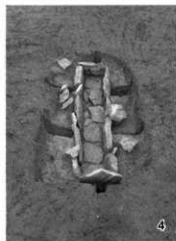
図版4 第4号竪穴住居SI004・第5号竪穴住居SI005



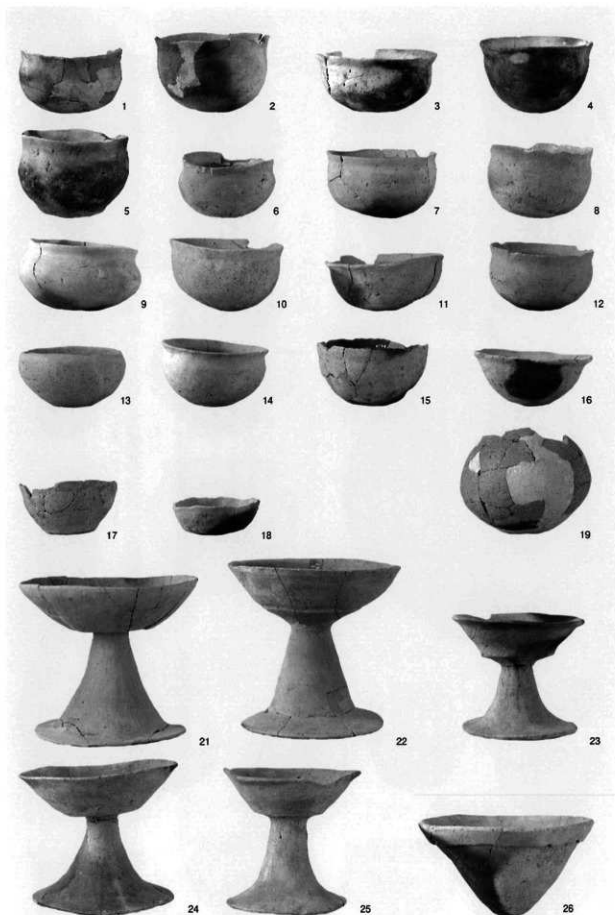
- 1 第4号竪穴住居
(SI004) 完掘 (南から)
- 2 第4号竪穴住居
(SI004) 遺物出土状況
(南から)
- 3 第4号竪穴住居
(SI004) 貼床除去後の
状況と土坑SK001
(南から)
- 4 第5号竪穴住居
(SI005) 完掘
(南から)



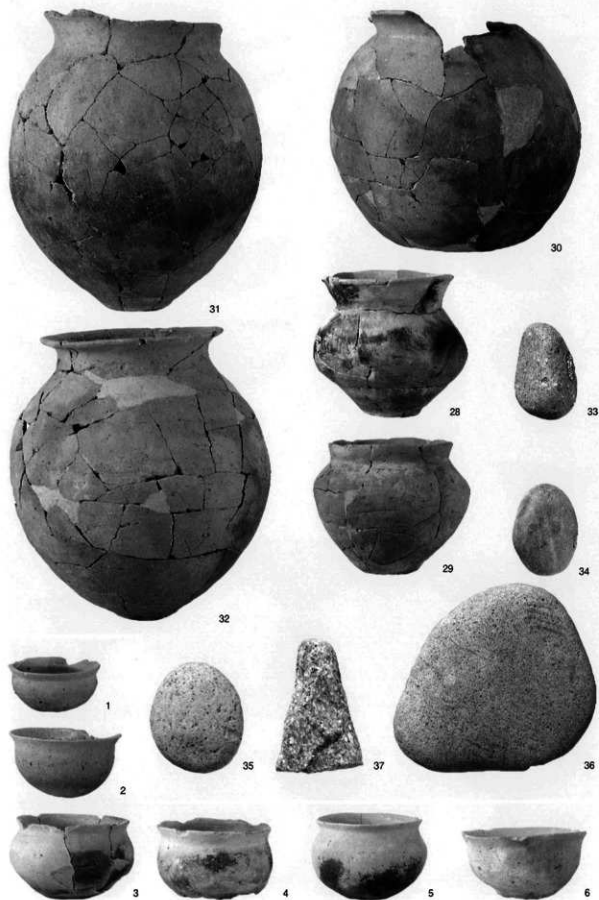
- 1 第1号掘立柱建物
(SB001) 全景 (東から)
- 2 第1号柵列 (SA001) 全景
(東から)
- 3 発掘作業状況 (左遠方は
琴平塚古墳・西から)



- 1 全景 (南東から)
- 2 主体部並石確認状況 (東から)
- 3 主体部並石確認状況 (南から)
- 4 主体部完掘状況 (南から)
- 5 主体部完掘状況 (東から)
- 6 主体部掘方 (東から)



图版8 第1号竖穴住居SI001(2)·第2号竖穴住居SI002(1)





9



11



14



7



8



17



20



18



28



21



19



29

图版10 第2号竖穴住居SI002(3)



22



23



24



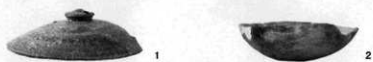
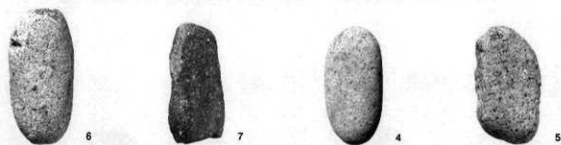
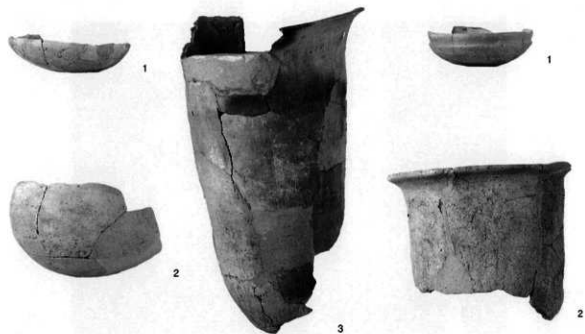
25



26



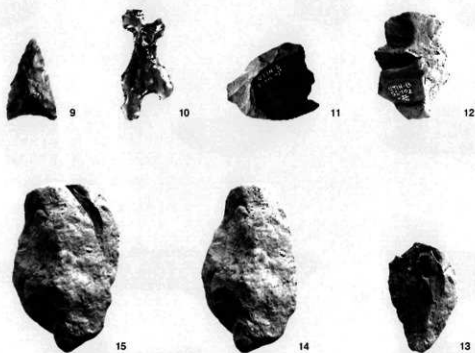
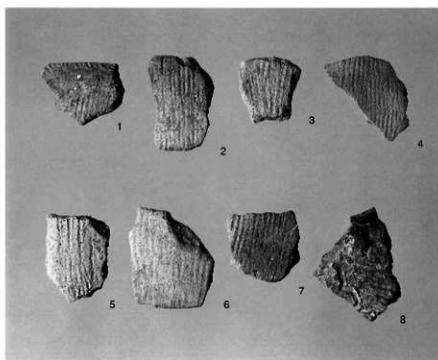
27



上段左 第3号竖穴住居SI003
 上段右 第4号竖穴住居SI004
 中段 第5号竖穴住居SI005
 下段 第1号古墳



図版12 その他の遺物



報告書抄録

フリガナ	イソオカキタイセキ							
書名	磯岡北遺跡							
副書名	独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	勝見一品							
編集機関	埋蔵文化財発掘調査支援協同組合(埋文協)							
所在地	〒169-0073 東京都新宿区百人町1-20-24 ☎ 03-3365-2277							
発行年月日	西暦 2005 (平成17)年2月25日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イソオカキタイセキ 磯岡北遺跡	ヒコノノノノノノノノノノノ 勢木原宇都宮市 東谷町	9201		36° 29' 16"	139° 54' 43"	2004.09.04. ～ 2004.11.25.	3,800	土地区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
磯岡北遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居 掘立柱建物 溝列	5軒 1棟 1条	土師器、須恵器、鉄 刀子	竪穴住居は5世紀中葉が 2軒、7世紀代が3軒。 5世紀代の2軒は焼失。		
	古墳		古墳	1基	鉄刀子2、石製模造 品1	墳丘は滅失。5世紀代中 葉の築造。		
	包含地	旧石器 縄文早期			剥片 縄文土器片(早期)、 石鏃、異形石器	調査区の西～南西部の竪 穴住居層土中からの出土 が多かった。		
要約	<p>調査地区は、南北方向に延びる田原台地上に立地する磯岡北遺跡の西側縁辺部に当る。</p> <p>検出した遺構は竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、溝列1条、土坑1口および新たに発見された古墳1基であった。第1・2号竪穴住居は焼失していたが、規模が大きく、完形に近い遺物がまとまって出土した。構築時期は5世紀中葉である。第3～5号竪穴住居は規模が小さく、意を備えた構造で、構築時期は7世紀代に互っていた。</p> <p>古墳は墳丘を失っていたが円墳で、墳丘中央部に箱式石棺が設けられ、内部から鎌形石製模造品と刀子が出土した。構築時期は5世紀中葉である。</p> <p>旧石器・縄文時代の遺構は検出されなかったが、調査区の南西部からは旧石器時代の剥片と縄文時代早期の非草式土器片、石鏃、および異形石器が出土し、古くから道跡が形成されていたことを窺わせた。</p>							

版 型：A 4
頁 数：80頁
本文組版：13級（9p）明朝を基本
図版製版：400dpi.200線2色
図版印刷色：墨+CF8629
印刷方式：オフセット印刷
用 紙：表紙 特殊製紙レザック66ぞうげ菊判121.5kg
本文 日本板紙淡クリーム琥珀A判57.5kg
図版 王子製紙サテン金藤N菊判76.5kg

© 2005 Maibunkyou.

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第53集

磯岡北遺跡

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年2月25日 発行

編 集	埋蔵文化財発掘調査支援協同組合（埋文協）
	☎ 169-0073 東京都新宿区百人町1-20-24 ☎ 03-3365-2277
発 行	宇都宮市教育委員会
	☎ 320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 ☎ 028-632-2764
印刷・製本	株式会社 正文社
	☎ 260-0001 千葉県千葉市中央区都町1-10-6 ☎ 043-233-2235

埋蔵文化財発掘調査支援協同組合（埋文協） <http://www.maibun.jp/>